

日本ルワンダ学生会議  
第 16 回本会議 活動報告書

2017年8月4日（金）～8月16日（水）



## はじめに

「日本ルワンダ学生会議 第16回本会議 活動報告書」を手にとってください、ありがとうございます。この報告書を通じて、皆様に、日本ルワンダ学生会議の今夏の活動を報告できることを大変嬉しく思っております。本書は、2017年8月4日から8月16日の間、日本人大学生8名がルワンダへ渡航し、現地でルワンダ人大学生と共に行った事業「第16回本会議ルワンダ渡航」活動内容をまとめたものです。

第16回本会議では、ルワンダの首都キガリに加えニャンザ、ブタレ、ムハンガ、ルヘンベリを訪れました。日本人メンバーの全員が初のアフリカ渡航であり、ルワンダの全てが新鮮でした。それに加え、皆好奇心が強く、例年に比べ開催期間が一週間ほど短いものでしたが、積極的にルワンダ人学生と交流し、充実した時間となりました。

今回訪問した、場所はジェノサイドのメモリアルパークや王宮を訪問し、ルワンダの歴史について学ぶと同時にルワンダ人学生との交流を通して彼らの自国の歴史と向き合う姿勢について知ることができました。また、PIASS 大学で教鞭を執る佐々木教授を訪問し、平和について考えさせられました。平和についてはウムチョムイーザ学園で情操教育をされております、斉藤照子さんの元を訪れ実際にお話を伺えたのは大変有意義でした。それだけではなく、ルワンダの先端技術を学ぶ施設も訪問致しました。ドローンでの血の輸送や、k1lab での3D プリンターの技術を見たときは、皆がルワンダの先進性に驚きました。さらに、ルワンダ人学生宅へのホームステイでは、実際にルワンダでの生活を体験し、同じ釜の飯を食べ、ルワンダへの理解だけでなく、ルワンダ人学生とグッと距離が縮まりました。

実際にルワンダを訪問してこそ、メディアでは伝えることができない生きた情報を、意義のある経験ができたのです。これだけインターネットが発達して、世界中のあらゆる人と交流できる現代ですが、やはり面と向かってルワンダ人学生達と交流してこそ、友情が生まれるのだと思います。実際に訪問することこそ、私達の活動理念である「相互理解」への第一歩だと思いました。

最後となりましたが、本事業は多くの方々のご協力とご支援なくしては実現することができませんでした。皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

本書が、ルワンダへの理解、異文化への理解の一助となって頂けましたら、幸いです。

2017年11月

日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

# 日本ルワンダ学生会議 第 16 回本会議 活動報告書

## 目次

はじめに 3

## 序章

日本側責任者挨拶	7
ルワンダ側責任者挨拶	8
関係者挨拶	9
日本ルワンダ学生会議団体紹介	10
ルワンダ共和国基礎情報	15

## 第 1 章 第 16 回本会議 事業概要

第 16 回本会議 概要・活動日程	20
-------------------	----

## 第 2 章 ルワンダ渡航活動報告書

ジェノサイドメモリアル	24
PIASS 大学 佐々木和之教授ご講演会	25
Zipline, KLab, FabLab	27
ルワンダ王宮	28
ホームステイ	30
ルワンダ議会	33
JICA ルワンダ訪問	33
ウムチョムイーザ学園	34
カリソケ研究センター	35
文化交流パーティー	37

### 第 3 章 学生会議活動報告

学生会議 概要 39

#### 日本側プレゼンテーション

日本人の特徴 40

「What's your dream?」 42

日本の小学校における英語教育 43

異文化理解 ～違いを乗り越えて～ 45

Future of JRYC 47

#### ルワンダ側プレゼンテーション

Car Free Day 51

UMUGANDA 52

ルワンダと観光 53

Strength of Rwandan Women 53

### 第 4 章 参加者感想

西野由花 青山学院大学国際政治経済学部 3 年 55

海老原峻 青山学院大学国際政治経済学部 2 年 56

眞鍋悠眸子 青山学院大学法学部法学部 3 年 61

佐藤美知瑠 共立女子大学国際学部 4 年 63

阿部理 早稲田大学人間科学部 5 年 64

原一生 早稲田大学政治経済学部 2 年 66

藤井恵 国際基督教大学教養学部 4 年 68

上川伶 北海道大学理学部 2 年 70

Lucky BARAHEBUZA ルワンダ国立大学 72

Mugisha Alain Philemon ルワンダ国立大学 77

Daniel IGIRIMBABAZI ルワンダ国立大学 80

後援・助成金団体様・ご協力いただいた方々 84

おわりに 85

# 序章

日本側責任者挨拶

ルワンダ側責任者挨拶

関係者挨拶

日本ルワンダ学生会議団体紹介

ルワンダ共和国基礎情報

## 日本側代表者挨拶

まず初めに、日本ルワンダ学生会議第16回本会議ルワンダ渡航を開催するにあたりましてご支援・ご協力を頂きました皆さまにこの場を借りて改めて御礼申し上げます。第16回本会議では、全てのメンバーが初めてアフリカの大地を踏むことになりました。不慣れなこと、知らないことも多く直前まで慌ただしい日々が続きました。そのような中、こうして大きなトラブルもなく無事に第16回本会議を終え、皆さまへルワンダの地で得た学びをお伝えできますことをとても嬉しく思います。日本ルワンダ学生会議、そしてルワンダ渡航に関してご支援、ご声援頂き有難うございました。

今回の本会議では当団体初の試みとして、ルワンダ渡航をする日本人メンバーを内部のみではなく、外部から公募するという挑戦を行いました。考えたのは、より多くの日本人へルワンダを知ってほしいという事です。これまでは内部の、すでにルワンダに興味のあるメンバーがルワンダに行くことでルワンダに対するより深い見地を得ることを目的とした本会議でした。しかし、それだけではルワンダという魅力あふれる大地を多くの人へ身近に感じてもらうことは難しいのではないかという思いから、アフリカへの敷居を少しでも下げるための一つ的手段として考えたのが渡航メンバーの外部募集です。結果として、今回は4人の日本ルワンダ学生会議メンバーと4人の外部募集メンバーでの渡航となりました。

様々な理由からルワンダ渡航を行った外部募集メンバーでしたが、帰国する頃にはルワンダの地に馴染み、今後も日本ルワンダ学生会議の活動に関わりたいと考えてくれたことが、今回の渡航で私がなによりも嬉しいと感じたことです。日本とルワンダは立地的には非常に離れており、今回も約25時間の空の旅でした。しかし、一度出逢い、声を交わせば分かり合い、笑い合う友人となれる。そのことを感じることでできる渡航となりました。

今回の渡航では「平和」を軸にジェノサイドの起こった1900年代と現在を比較した活動を多く行いました。ジェノサイドメモリアルを始め、PIASS大学で平和学をお教えしている佐々木教授のご講演、JICAや大使館の方々との出逢い、文化交流のパーティーから最先端の技術であるドローン輸送会社など、過去の出来事から現在のルワンダへの発展をルワンダと日本の学生が共に学び、語り合った渡航の日々の記録にしばしお付き合いいただけましたら幸いです。

日本ルワンダ学生会議 日本側代表  
西野 由花

## ルワンダ側代表者挨拶

訳：後藤聡子

JRYC の会議はいつも貴重な経験で、第 16 回本会議も決して例外ではありませんでした。それは一人一人違う人々、つまり異なる背景を持ち、我々2か国、ルワンダと日本、また世界全体について異なる視点を持つ人々、様々な発見をしたいと思っている人々、これからともに発見していく人々と一緒に様々な発見をしていきたい人々、自分のアイデアや考え方について共有したい人々、他人の意見を考慮できる人々、そして最終的に友達になれる人々との出会いでした。

会議のコーディネートはすごく楽しくやりがいのあるものでした。物事を企画することや人々、そしてそれらにどのように対処していくかについて様々なことを学びました。当初の計画や希望通りにいかなかった箇所には後悔は残りますが、最後には企画やコミュニケーションにおける上達を感じられ、達成感を味わえます。

私は今会議に参加してくださったすべての方に感謝いたします。彼らがともにいてくれて、一緒に過ごした経験、そして彼らの協力と積極的な参加をありがたく思います。特に本会議のためにこれだけの長旅をして来てくれた日本側のメンバーに感謝します。会議の準備における彼らの理解と一生懸命さが伝わってきました。我々を迎え入れ、様々な活動をさせていただき、また我々のイベントである JRYC 文化交流への招待に応じてくださった団体様や個人様に感謝いたします。

JRYC での経験に感謝の気持ちでいっぱいです。

日本ルワンダ学生会議 ルワンダ代表

Léandre BERWA



## 顧問挨拶

本報告書を手にとっていただき、ありがとうございます。

今回の渡航も無事に終了することができたのは、JRYC ルワンダをはじめ、現地での活動にご協力いただいた方々、また WAVOC スタッフのサポートのおかげです。感謝申し上げます。

今回の渡航は、奇しくもルワンダ大統領選挙の直後で、現職のカガメ大統領が三選を果たした時期でもありました。欧米などからは強権的な長期独裁政権と批判される中、さらなる 7 年の大統領の任期の間、ルワンダはどのようになっていくのか、世界は見続ける必要があります。ジェノサイド直後から事実上の最高実力者になり、大統領となったカガメ大統領は、ジェノサイド後のルワンダを象徴する人物でもあります。今、ジェノサイドは「歴史」となりつつあります。しかしポスト・カガメこそがポスト・ジェノサイドなのではないかと、最近強く感じます。ルワンダの政治が平和的、民主的、そして基本的人権にのっとなって移行していくのかどうか……。それを見極めるには、外側から政局を分析するだけではなく、内側にいる「人々」との対話や共感を持つことも重要だと思います。JRYC の活動理念である「相互理解」は、そういう文脈の中で、より大きな意義を持つのだと思います。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティア・コーディネーター  
立教大学異文化コミュニケーション学部 助教  
小峯茂嗣



## 日本ルワンダ学生会議 団体紹介

### JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION

#### 日本ルワンダ学生会議とは？

日本ルワンダ会議（JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION）は、「相互理解」を活動理念に掲げてルワンダの学生と学術・文化交流を行う学生団体である。ルワンダへの渡航や、ルワンダ側の学生の日本への招致を通して、異なる背景を持つ彼らと顔の見える関係を築けるよう模索している。日本人同士でも分かり合うことは容易なことではないが、日々試行錯誤しながら活動している。

#### 主な活動内容

- 本会議の実施  
（日本人メンバーがルワンダへ渡航、ルワンダ人メンバーを日本へ招致を交互に実施）
- 週 1 回の定例ミーティングの開催
- 日本とルワンダに関する勉強会
- 講演会や出張授業の実施
- 活動報告書の開催や報告書の作成
- 各種イベントへの参加による周知活動

#### 構成人数

日本側メンバー10名（渡航者8名）、ルワンダ側メンバー19名

#### 活動理念

我々は「相互理解」を活動理念に掲げ日々活動している。

虐殺が行われた協会の壁に掛けられている 1 枚の布には、次のような言葉が書かれている。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたなら、こんなことは起きなかっただろう」

我々の活動は、相手を知り、また自分たちを知ってもらうという、すごく地道なものである。しかし、1994年に大虐殺を経験したルワンダにとって、偏見を捨てた相互理解は大

きな意味を持つ。また、我々にとってもあの悲劇から目を背けてしまったという自責の念に対する少しでも反省として、このアプローチはとても意味のあるものだと思っている。

しかしこの相互理解という活動は、決して紛争や貧困などの社会問題ありきで行うべきものではないだろう。国際協力において、先進国が一方的に「問題解決のために支援する」形を取っているのは、先進国への依存関係が築かれてしまい、かえって発展が阻害される可能性がある。よって、その国の自立を促すためにもその社会問題解決をともに行える「仲間」が必要なのである。そしてこの「仲間作り」に必要なことが、まさに相互理解であると認識している。

我々は実際に現地で暮らす人々と交流する中で彼らの価値観や人生の物語に触れることで、相互理解、また信頼関係を構築することを目的としている。そうすることによって我々も、ルワンダの“Never again”に対して当事者意識を持つことができ、「自由・平等・尊厳・寛容」の視点から真に平和な社会を構築することのできると考えるからである。

近年頻発する国際紛争の共通課題として宗教や民族対立がある。現にルワンダにおける植民地政策や虐殺のプロパガンダも人々に「憎しみ」、「差別」、「偏見」の考えをもたらしてしまった。よって、差別や偏見の撤廃こそが、平和な社会への第一歩だと考えている。ルワンダの悲劇に立ち向かうさえに必要な仲間作りのために、我々は学生会議という形を通して相互理解を育んでいく。そしてその会議では日本とルワンダの両国の歴史や社会問題を議論し、板貝に意見を言い合うことで双方を理解するよう努める。このような活動を通して我々は日本とルワンダに限らない人類の共通課題に向き合っていく。

## 活動理念の継承

当団体は活動理念を継承していき、学生会議としての継続性、発展を確保する。

ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終わりを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、かつすべての国民が相互の援助および相互の関心の精神をもって果たされなければならない神聖な義務である。」

ルワンダでは、相互の援助や関心の精神が広く行き渡っていなかったことで、民族対立が虐殺という悲惨な形で結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒常的な平和を構築するという視点から、学生会議を通じた交流を行っている。実際に日本とルワンダの学生が「相互の風習と生活」

を知ることによって、遠く離れている国同士でも信頼関係を築けると思っている。そして、この根本となっている「相互理解」という活動理念は、学生会議を継続的に行うことによって継承されていき、また新規メンバーにはこれに同意していただくものとしている。

## 略歴

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を開催
2009年3月	団体名を「ルワンダ・プロジェクト」
2009年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
2009年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
2010年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
2010年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
2011年12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年2月	ルワンダにて第9回本会議を開催
2013年12月	日本にて第10回本会議を開催
2014年8月	ルワンダにて第11回本会議を開催
2015年1月	日本にて第12回本会議を開催
2015年8月	日本にて第13回本会議を開催
2016年2月	ルワンダにて第14回本会議を開催
2016年8月	日本にて第15回本会議を開催
2017年8月	ルワンダにて第16回本会議を開催

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員教授の小峯茂嗣氏が設立した「ルワンダ・プロジェクト」が母体となり、2008年から学生が主体の運営を始めた。以後、日本とルワンダの間の学生交流を中心に精力的に活動している。

## 平成 29 年の活動実績

2017 年 4 月	新入生勧誘(早稲田大学主催ボラカフェ、ボランティアコンテスト参加)
7 月	勉強合宿
8 月	ルワンダにて第 16 回本会議実施
10 月	成蹊大学にて出張授業
11 月	渡航報告会を開催
12 月	横浜商業高校にて出張授業を開催 (予定)

## 公認

- 在日本ルワンダ共和国大使館
- アフリカ平和再築委員会 (ARC) 事務局長 小峯茂嗣氏
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)

## 日本側メンバー

西野由花 青山学院大学国際政治経済学部 3 年  
海老原峻 青山学院大学国際政治経済学部 2 年  
眞鍋悠暉子 青山学院大学法学部法学部 3 年  
佐藤美知瑠 共立女子大学国際学部 4 年  
阿部理 早稲田大学人間科学部 5 年  
原一生 早稲田大学政治経済学部 2 年  
藤井恵 国際基督教大学教養学部 4 年  
上川伶 北海道大学理学部 2 年  
山下雅俊 成蹊大学法学部 4 年  
後藤聡子 早稲田大学政治経済学部 1 年

## ルワンダ側メンバー (以下全員ルワンダ国立大学)

Lucky BARAHEBUZA  
Léandre BERWA  
Consolatrice BYRINGIRO  
Titi HAVUGANA  
Gloria IGIRANEZA  
Daniel IGIRIMBABAZI

Peace Diane ISHIMWE  
Louise MAHIRWE  
Philemon MUGISHA  
Jean Pierre MUHIRWA  
Fred NGABO  
Noella NGOGA  
Josué NIYOMUTABAZI  
Nadia NIYONIZEYE  
Blaise Pascal SHYAKA  
Florence UMUHOZA  
Gloria UWAMAHORO  
Charles UWAMBAJIMANA  
Vanessa UWASE

## 連絡先

メールアドレス：[japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)

ホームページ：[jp-rw.jimbo.com/](http://jp-rw.jimbo.com/)

フェイスブック：[@日本ルワンダ学生会議](#)

インスタグラム：[japan.rwanda](#)

## ルワンダ共和国情報

### ABOUT RWANDA

#### ルワンダ共和国基礎情報



ルワンダ共和国は、アフリカ大陸中等部に位置する小さな内陸国である。

「千の丘の国」と賞されるほど自然豊かな国であり、治安も良く、ビジネスがしやすい国として知られてい ru

。

- 首都：キガリ
- 人口：約 1,210 万人（2014、世界銀行）
- 面積：2.63 万km<sup>2</sup>
- 言語：ケニアルワンダ語、英語（2009 年、公用語に追加され、仏語に代わって教育言語となった）、仏語
- 宗教：キリスト教（カトリック、プロテスタント）、イスラム教
- 民族：フツ、ツチ、トゥワ

#### 略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国成立
1890 年	ドイツ保護領（第一次世界大戦後はベルギーの信託統治領）
1961 年	王政に関する国民投票（共和制樹立を承認） 議会在カイバンダを大統領に提出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター（ハビヤリマナ少将が大統領就任）
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件をきっかけに「ルワンダ大虐殺」発生（～1994 年 6 月）
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線（RPF）が全土を完全制圧 新政権樹立（ビジムング大統領、カガメ副大統領就任）
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任

2000年4月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003年8月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003年9-10月	上院・下院議員選挙
2008年9月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2010年8月	カガメ大統領再選
2013年9月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）

## 政治体制・内政

- 元首：ポール・カガメ大統領（H.E. Mr. Paul KAGAME）
- 政体：共和制
- 議会：上院（26議席、任期8年）、下院（80議席、任期5年）
- 政府：首相 アナスターズ・ムレケジ（Rt. Hon. Anastase MUREKEZI）  
外相 ルイーズ・ムシキワボ（Hon. Louise MUSHIKIWABO）
- 内政

1962年の独立以前より、フツ（全人口の85%）とツチ（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツが政権を掌握し、少数派のツチを迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチが主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ過激派によるツチ及びフツ穏健派の大虐殺が始まり、同年7月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ）、カガメ副大統領（ツチ）による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。以後行われた上院（2003年、2011年）・下院議員（2003年、2008年、2013年）選挙の全てで、与党 RPF が勝利した。

2000年、中長期的国家開発計画である VISION2020 を発表、2020年までに中所得国への転換をめざし、「知識集約型経済の実現」などを掲げた。

カガメ大統領（2010年の大統領選挙で再選）は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。なお、ルワンダは女



性が国会議員に占める割合が 57.5%で世界一（2014 年 10 月現在）。上院副議長，下院議長の要職を女性が占め，女性閣僚の割合は約 26%と，女性の社会進出が進んでいる。

2007 年には，ルワンダ独自の成長戦略である第二次経済開発貧困削減戦略（EDPRS II）を発表し，最近の国家予算では，経済構造改革，農村開発，若年層雇用創出，公的説明責任といった分野に予算が重点的に配分されている。とりわけ経済構造改革を最重要分野としている。

2015 年 8 月，憲法改正を実施するための憲法審査委員会設立法案が採択に付され，上，下両院議会を通過し，同法は成立した。これにより，大統領三選を禁止する憲法第 101 条の改正への動きが加速化すると見られている。

2015 年 4 月に入って，隣国ブルンジの情勢が悪化したことにより，ブルンジ難民の流入が続いており，ルワンダ国内のブルンジ難民は，6.8 万人（2015 年 7 月現在）に達している。

## 経済

- 主要産業：農業（コーヒー、紅茶等）
- GDP：82.7 億ドル（2015 年、世界銀行）
- 1 人当たり GNI：732 米ドル（2015 年、IMF）
- 経済成長率：6.9%（2015 年、世界銀行）
- 物価上昇率：4.5%（2015 年、IMF）
- 総貿易額（2014 年、EIU）：輸出 7.23 億ドル  
輸入 19.9 億ドル
- 主要貿易品名（2014 年、EIU）：輸出 コルタン、絹、茶、コーヒー  
輸入 消費財、中間財、資本財、エネルギー
- 主要貿易相手国（2014 年）：輸出 中国、コンゴ民主共和国、マレーシア、タイ  
輸入 ウガンダ、ケニア、インド、中国
- 通貨：ルワンダ・フラン

## 二国関係

- 政治関係
  - (1) 日本は，ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが，2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが，2005 年 1 月に再開。

(2) 1994年4～6月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年9～12月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ等に約400名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

● 経済関係（対日貿易）（2014年、財務省）

(1) 貿易額

輸出 1億8,877万円

輸入 15億7,837万円

(2) 主要品目

輸出 コーヒー、雑貨

輸入 自動車、二輪、医療関連機械（以上、外務省ホームページより引用）

# 第 1 章 第 16 回本会議 事業概要

---

第 16 回本会議 概要・活動日程

## 第 16 回本会議 概要・活動日程

### ABOUT THE 16<sup>th</sup> CONFERENCE

#### 開催日時・場所

日程：2016年8月4日（金）～8月16日（水）

場所：ルワンダ

#### 活動内容

日本ルワンダ学生会議日本メンバー8名が、ルワンダを訪問し、ルワンダ人学生とともに、学術・文化交流事業を実施する。ルワンダ人学生とともに、ルワンダ国内の様々な場所を訪れたり、ホームステイや、テーマを決めディスカッションを行なった。ほとんどのメンバーが初対面であったので、0からの信頼関係構築を目指した。

今回の事業では、ジェノサイドを乗り越えたルワンダで平和について考えること、そして、ルワンダの今を知る2つのことを中心に、企画を行った。それぞれの訪問先での詳細は、後述するとし、ここでは概要をまとめる。

「平和」を考える上では、ジェノサイドメモリアル、ピアスの Protestant Institute of Arts and Social Sciences の佐々木教授、情操教育を行うウムチョムイーザ学園を訪問させていただいた。

日本人、ルワンダ人双方が積極的に交流して、有意義な意見交換ができた。

ルワンダの今を知る上では、ドローンを医療技術に生かす Zipline や3Dプリンターなどを扱い、未来のイノベーター達を育てる Klab を訪問した。日本人学生側は、予想だにできなかったルワンダ側の先進技術に驚かされた。

ルワンダ人学生と交流する上では、日頃の活動もそうですが、ホームステイや文化交流パーティーが我々の距離をグッと縮めた。

その他にも、日本大使館にご招待させていただいたり、JICA の事務所を訪問させていただいたり、通常ではお会いできないような方々にお会いできた。様々な立場の方のご意見を伺えて、大変勉強させていただいた。

全体を通して日本ルワンダ学生会議だからこそできた貴重な経験が数多くあった。実際に訪問して、交流してこそできたものであった。

## 事業目的

- 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。また、これは、両国の学生が自国についても再認識し、理解を深めることも兼ねる。
- 日本側メンバーは実際に現地に行くことによって、今のルワンダを自分の目で見て、その現状を日本人たちに伝える。
- 長い日程を共に過ごすことで、友情関係を育み、信頼関係を構築する。そしてこれが、両国の相互理解への第一歩となる。
- 学生会議や文化交流を通じて両国の学生が自分の国のことを発表することで、相互の国への先入観を捨て、また異文化を理解し受け入れる寛容性を身につける。
- 日本において渡航で得たことを伝える場として報告会を設け、また報告書やドキュメンタリーを作成することによって日本人にルワンダへの理解を促す。同様にルワンダでも事後活動を続けることで、ルワンダにおける日本の理解を促す。

## 第 16 回本会議スケジュール

実施日	行程
8月5日(土)	日本人到着 プロジェクトリーダーによるプロジェクト説明
8月6日(日)	キガリのジェノサイドメモリアル訪問 学生会議
8月7日(月)	王宮訪問 PIASS 訪問 ホームステイ
8月8日(火)	ウムチョムイーザ学園訪問 学生会議 ホームステイ
8月9日(水)	Zipline (ドローン施設) 訪問 議会訪問
8月10日(木)	JICA 事務所訪問 kLab (IT 施設) 訪問
8月11日(金)	カリソケ (ゴリラ) 研究センター訪問
8月12日(土)	休息
8月13日(日)	JRYC 文化交流パーティー
8月14日(月)	在ルワンダ大使館訪問 学生会議 第 16 回渡航終了パーティー
8月15日(火)	お土産交換 日本人出発

## 第 2 章 ルワンダ渡航活動報告書

ジェノサイドメモリアル

PIASS 大学 佐々木和之教授ご講演会

Zipline, KLab, FabLab

ルワンダ王宮

ホームステイ

ルワンダ議会

JICA ルワンダ訪問

ウムチョムイーザ学園

カリソケ研究センター

文化交流パーティー

# ジェノサイドメモリアル

担当者：海老原峻

## 企画概要

日時：8/6(日)

場所：キガリジェノサイドメモリアル

参加者：日本側メンバー8名

ルワンダ側メンバー5名

## 企画目的

### ①ジェノサイドに対する理解を深めること

…1994年の大規模なジェノサイドに至るまで、その誘因と同じくらいの数の予防策が存在したはずである。なぜジェノサイドを止めることが出来なかったのかということを知解していくためには、まず知ることから始めなくてはならない。

### ②ルワンダにおけるジェノサイドの扱われ方を知ること

…ジェノサイド後、ルワンダは和解と赦しのプロセスを邁進してきた。そして、ジェノサイドの規模、歴史的な根深さを考慮すると、奇跡的な復興を遂げたと言える。なにがそれを可能にしたのか。その一つはkwibukaに見られるような、歴史的な事実を後世に残そうとする努力であろう。この点において重要な役割を果たしているジェノサイドメモリアルに訪問することにより、ルワンダにおけるジェノサイドの位置づけを探る。

## 活動内容

キガリジェノサイドメモリアルを訪問し、展示を見てジェノサイドに関して深く学んだ。被害者の遺留品(服や靴など)を直接見ること、改めてその悲惨さを実感することが出来た。

また、分からない点、知りたい点を同行した現地の学生に質問することにより、当事者としてのルワンダ人から見たジェノサイドを知ることが出来た。

## 感想

私が最も印象に残っているのは、同行してくれたルワンダ人学生の立ち振る舞いである。訪問中、彼らは常に冷静で、いつもと変わらない様子であったのだ。ジェノサイドメモリアルという場所柄上、私は中には気分が悪くなってしまふ学生がいるかもしれないと予想していたのだが、それは間違いであった。(精神的に来られる学生だけが来たからかもしれないが。)

彼はいわゆる「カガメ世代」であり、ジェノサイドには直接的に関与していたわけではなく、身内に加害者若しくは犠牲者がいることは十分考えられる。彼は自分たちの凄惨な歴史を受け入れているようであり、その姿に心を打たれた。

しかし、同時に不安な気持ちにもなった。それは、彼らがジェノサイドを忘れていく姿が頭をよぎったからである。いくら衝撃的なことであっても、月日を経るごとに印象は必ず薄れていく。その時、アフリカの奇跡とも称されるルワンダの平和は危ういものになってしまうだろう。





# PIASS 大学

## 佐々木和之教授ご講演会

担当者：西野由花

### 企画概要

日時:8月7日

場所:プロテスタント人文・社会科学大学

(Protestant Institute of Arts and  
Social Sciences/略称ピアス)

参加者:佐々木和之教授、日本ルワンダ学生会  
議メンバー

### 企画目的

本企画ではジェノサイドは現在のルワンダにどのような影響を与え、どのような存在として認識されているのかを知識だけでなく実感を通して理解することを目的とする。そのためにピアス大学に訪問し、佐々木教授のお話を伺うと同時に、日本人メンバー、ルワンダ人メンバーの双方を交えて質疑応答や意見の交換を行うことで、現在のルワンダの平和について考えていく。この経験から、現地でどのように平和学について人々へ教えているのか、ルワンダの人々はそれをどのように受け入れているのかを学ぶことが、本企画の目的である。

### 企画経緯

佐々木教授はルワンダのジェノサイド後、初の平和学をルワンダにて教え、平和構築プロセスを行う。ジェノサイドの爪痕の残る中、ルワンダの人々はどのように歴史を受け入れていくのか、発展を遂げた現在どのような問題が存在しているのか、現地で教鞭をとり平和活動続ける佐々木教授からお話を伺うことでルワ

ンダの現在に対して表層に留まらない深い理解を得る。

また、それと同時に日本人が他国の平和構築に関わる際、日本人と当事者はそれぞれどのような意識を持つべきなのかを考えていくきっかけとして、この企画を提案した。

### 活動内容・報告

当日はブタレにあるPIASS大学へ訪問し、佐々木教授への質疑応答の形式でお話を伺った。教授がルワンダで平和学をお教えることになった経緯や、ジェノサイド後から現在への学生たちの考えの変化についてルワンダ学生、日本人学生、佐々木教授と意見を交換し合った。



(PIASS 大学)

### 感想

今回の企画では、ジェノサイドと平和について、改めてルワンダ側のメンバーと話し合う貴重な機会となった。ジェノサイドは1994年に起こった出来事であり、現在も非常にセンシティブな話題である。そのような話題に関して、ルワンダ側メンバーは真摯に考え、自らの言葉を私たち日本人に伝えてくれた。特に印象に残ったのは、ジェノサイド後に生まれた彼らにとって、ジェノサイドを経験した自らの親などの

世代とは虐殺に対する考えが変化していると言っていたことだ。日本でも戦争体験を後世に伝えていく試みの難しさが話題に上がるように、ルワンダでも虐殺が過去のものとなる時が近いのかもしれない。それが手放しで喜べるものなのか、今の私には分からなかった。しかし、今後注視していきたいと思ったことでもある。このように彼らの生きた言葉で現在のルワンダの若者の声を聞ける貴重な機会こそ、この日本ルワンダ学生会議の意義であると思う。このような学びの機会をいただいた佐々木教授には、厚く御礼申し上げます。



## Zipline, kLab, FabLab

担当者：原一生

### 企画概要

日時:Zipline:8/9、kLab,FabLab:8/10

場所: zipline、kLab、FabLab

参加者：日本ルワンダ学⊔会議メンバー

### 企画目的

ドローンで血液を輸送するという世界的に見ても新しいアイデアを用いて、地域の医療システムに変革をもたらした Zipline や多くの IT 起業家を輩出している kLab、そして最先端の製造機器を有する FabLab を訪問し「アフリカの奇跡」と呼ばれるまでに躍進を遂げたルワンダという国の強みである IT 産業の“今の姿”を体験することを通じて、発展途上国というルワンダだけでなくアフリカに対して持っているイメージを大きく変える機会に出会うことを目的とする。

### 活動内容

Zipline では、実際に血液を届けるプロセスをマネージャーの説明を聞きながら学び、質疑応答を行った。kLab、FabLab では、新たなアイデアを生み出すために、優秀なエンジニア達が交流しものづくりを進めている様子を見て回り同様にマネージャーへの質疑応答を行った。

**感想** Zipline ではドローンと医療を掛け合わせるという斬新なアイデアで実際に事業が成り立っており、IT の市場や地域社会における可能性を改めて感じた。kLab の内装は開放感あふれるレイアウトになっており、エンジニアの交流を促進し、「新たなサービスが生まれる場所」の独特の雰囲気を感じた。FabLab で

は 3D プリンターやレーザーカッターなどの精密機械が設置してあり、エンジニア達の育成にどれだけ政府が力を入れているかを目の当たりにすることができた。また kLab、FabLab は JICA から資金の援助を受けているという事実を知り、財政難と言われている日本は意外にも外への関心が高いことに驚いた。



# ルワンダ王宮

担当者：眞鍋悠眸子

## 企画概要

日時：8月7日（月）

場所：ルワンダ王宮（ニヤンザ）

参加者：ルワンダ人メンバー5人、

日本人メンバー全員

## 企画目的・経緯

ルワンダについて学ぶとき、よく、ジェノサイド～ジェノサイド以後・現代のルワンダが取り上げられがちである。ルワンダがかつて王国であったことを知らない人も多くいるであろう。ルワンダがベルギーに植民地化されていたことは有名だが、独立を果たした1962年にルワンダ共和国となった。

なぜジェノサイドが起こったのかよく理解するためには、国が成り立った時代の歴史を理解することがとても重要である。ルワンダが王国であった頃の生活習慣や価値観を学ぶために、現在は博物館として一般公開されている新・旧王宮の訪問を企画した。

また、訪れた王宮は1959～1962年の間ルワンダ王国の首都であったニヤンザに位置している。ここは現在でも牛乳が有名である。現在の首都であるキガリからは2時間ほど離れた町で、キガリとは違った面を見る機会にもなる。

## 活動内容

まず初めに、ガイドの人に、萱で出来た旧王宮を案内してもらった。これは王族であったツチ族によって1950年ころまで使われたもの（現在あるものはレプリカ）である。敷地の入り口の両脇には、これは国の繁栄を意味してい

る。敷地の中に直系15メートルの円錐形の、日本の竪穴式住居のような萱葺きの建物があり、これが旧王宮である。内部には、王の寝室、王妃の部屋、世話係の者のスペース、ダンスを鑑賞する場所などがある。中に入ると、竹でできた模様のついた仕切りのようなものがあり、内側から外は見えるが、外から中は見えない仕組みになっていて、一般の人は外から王の姿が見えないようになっていた。入場の際には、靴を脱ぎ、王に跪いて挨拶をする儀式がある。周りには王宮より小さめの同じ円錐形の建物が二つあった。一つはビールの蔵で、もう一つは牛乳のための蔵である。ビールの蔵で働けるのは男子で、牛乳の蔵で働けるのは女子であり、かつ処女でなければならないとされていた。これらの建物の裏には現在でも牛が飼育されており、触れ合うことができた。

次に、新王宮を案内してもらった。これは、1959年にベルギーがルワンダ国王であるムタラ3世のために新しく建てられた宮殿であったが、引っ越す前に王は死去した。外身も中身もヨーロッパ調の建築であったが、家具は異様に少なかった。これは、ツチ族の王政に反感を持っていたフツ族がジェノサイドの際に略奪したためであった。

## 感想

王宮の仕組みを知ると、ルワンダ王国時代の性についての考え方がよく見えた。中にはとても興味深い習慣があった。例えば、王と王妃の寝る位置はいつも決まっていて、王が入り口側、王妃が奥側で、王妃はいつも回りこんで寝床につかなければならないこと。これが現代でも習慣として残っているところもあること。また、女性は既婚であったとしても、一度王に見初められれば王と結婚することを拒否できなかった。

王宮の中は、王の寝床とそれ以外のスペースは、仕切りはあれど筒抜けである。王と王妃のプライバシーを守るために、楽器隊が音楽を演奏することがある。実際のプライバシーの有無は疑わしいが、それほど後継者をもつために必死に雰囲気作りをしているということだろう。

上で述べたとおり、王の周りの仕事も区別があり、バナナからビールを作る仕事は男子のみで、一方牛乳は女子のみ、しかも牛乳を扱うものは清廉潔白でないといけなく考えられたため、処女であることが必須であった。そのため、この仕事を行う少女には多くの行動制限があったという。

少し日本人の感覚と似ていると思ったのが、王に牛乳を勧められたら絶対に断ることはできなくて、代わりに飲みきれそうな大きさの牛乳つぼを選ぶというルールである。酒の席で日本人が上司からの勧めを断れないのと似ていて面白いと思った。

いずれのことも、どんな王宮でも起こりうることもかもしれないが、この場所が1950年ごろまで使われていたのである。それを考慮すると、どれほどルワンダが急激に発展したのかわかる。ルワンダメンバーの内の一人に聞いた話だが、ポールカガメ大統領が進める女性の社会進出政策とは裏腹に、ルワンダ人の根底にはまだ男尊女卑の文化が残っているという。ルワンダは2016年にジェンダーギャップ指数(男女平等)ランキング世界5位である。ルワンダという国が王国から共和国になってからそう長くない歴史の中で、これほどまでに女性の地位が向上した国はない。王宮を訪れてこのことを実感した。



〈新宮殿の前で〉



〈国王の旧宮殿とガイドさん〉



〈メンバーと敷地内で飼育されている牛〉



# ホームステイ

担当者：眞鍋悠眸子

## 企画概要

日時：8月8日（火）

場所：各メンバーの家

参加者：ルワンダンメンバー5人

日本人メンバー全員

## 企画目的

どこか新しい土地に行ったとき、街並みや、人々から、言語や文化、食べ物など、たくさんを知ることができるだろう。しかし、旅行以上に、その国のことを理解したいと思ったとき、ホームステイは最も有効な手段と言える。ホームステイをすることは、現地の人の日常生活の中に入ることができ、実際にどんなものを食べ、家族とどんな話をし、どんなことに喜びを得るのか等、本の中では学べない貴重な体験である。これによって、よりルワンダの文化を身近に感じ、理解することができる。また、同年代の学生のメンバーだけでなく、様々な年代のルワンダ人と話をすることで、日本という国や、日本人という存在をよく知ってもらえる機会である。

## 企画経緯

本企画は、日本ルワンダ学生会議に所属するメンバーだけでなく、その家族とも交流することで、本団体の理念である「相互理解」を実践し、文化や歴史及びルワンダ人の様々な価値観に触れる機会である。お土産交換などを行うことで、ゲストハウスに滞在するだけでは知ることができない、実際のルワンダ人の生活習慣や、家族の在り方など、外側だけでなく、内側から

も深く理解できるような機会にしたいと考えた。

## 活動内容

8月8日（火）の学生会議後、ルワンダン男子メンバー3人の自宅へ日本人男子メンバー4人、ルワンダン女子メンバー2人の自宅へ日本女子メンバー4人が滞在し、次の日の朝まで生活を共にする。食事や家族との会話、お土産の交換などからお互いの文化について交流する。

## 感想

最初から最後まで、驚いたことのれんぞくだった。まずは、玄関から私たちが入る前に、家族全員が歓迎に外まで出てきてくれたことである。客人をもてなす習慣が見て取れた。夜遅かったにもかかわらず、皆が食事もせず待っていてくれて、家の中を案内してくれた。

次に驚いたことが、お母さんの英語力である。「まだまだ下手だけど、英語練習しているの」と言って私たちに家のことを説明してくれ、言語を学ぶ高いモチベーションに驚かされた。同じ年代の日本人よりもはるかに英語力があると思った。

食事の前にお風呂に入るよう勧められて、大きな2つの桶を渡された。一つは熱湯で、もう一つが水である。お湯の温度を調節しながら体にかけてるといいらしい。その後で、食事が始まった。さつまいも、アイリッシュポテト、キャッサバ芋、豆の煮込み、肉の煮込み、炊き込みご飯、野菜の酢の物、ソース、フルーツが用意された。食事はビュッフェ形式で、取り分ける前には皆でお祈りをした。

茶の間には一周ぐるとイエスキリストの像や肖像画が飾られていることに少し威圧感があった。また、メンバーの妹から最初に「あ

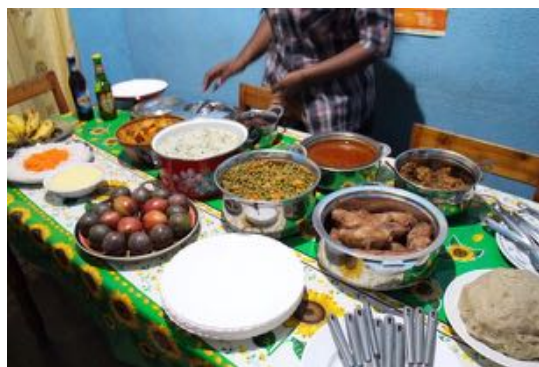
あなたはクリスチャンになろうと思うの？」と聞かれたことに度肝を抜かれて、何と答えたらいいかわからなかった。食事は、穀類が中心のせいとお腹がいっぱいになりやすく、特によく煮込まれた牛肉がおいしかった。

寝る前に、メンバーの部屋を見ることがあり、小さめできれいに片づけられた部屋に靴が30足ほどあった。ルワンダ人は靴をきれいにしておく文化があると聞いたが、靴に対するこだわりがここで垣間見えた。

結局のところ、次の日のお昼までお世話になった私たちだが、朝ごはんも昼ご飯もご馳走になり、至れり尽くせりであった。さらに、夜の1時くらいまで私たちに付き合ってくれたお母さんが、次の日の朝4時半に親せきの結婚式のために出かけて行ったことや、お父さんが朝早くからお店の準備をしていることから、彼らはとても勤勉で、かつ慈悲深く、その隣人（しかも外国人である私たち）への無償の愛は、イエスキリストへの深い信仰の表れだと感じ取れた。



〈ご家族全員と〉



〈晩御飯の様子〉



〈ご両親と〉

# ルワンダ議会

担当者：海老原峻

## 企画概要

日時：8/9(水)

場所：ルワンダ議会

参加者：日本側メンバー8名

ルワンダ側メンバー7名

## 企画目的

①ルワンダで共和制が樹立された

歴史を学ぶ

…1895年、ドイツの植民地支配により、ルワンダ王国の支配体制は終焉を迎えた。そして、第二次世界大戦後の1962年に独立を達成し、ルワンダ共和国が成立する。その後ルワンダ議会はどのような政治的役割を果たしてきたのか。

②ルワンダ人の歴史観について学ぶ

…植民地支配に対してどのような感情を込めているのか、現行の支配体制に対してどのような評価をしているのか、といった公式の見解を知ることができるはずである。

## 活動内容

展示を見学し、分からない点、深く知りたい点があれば、同行した現地の学生やガイドの方に質問をし、理解を深めた。また、歴史的に重要なモニュメント等を見学し、その意義を考えた。

## 感想

国会の博物館というよりも、政権与党であるRPFの博物館という印象であった。若しくは、訪問の数日前に見学をしに行ったジェノサイドメモリアルと、内容が被った展示も多

かった。例えば、RPFがキガリを陥落させた作戦について説明した事細かな展示や、ポール＝カガメを中心としたRPFの兵士たちを描いた水彩画があった。また、照明が暗いセクションがあったが、これはRPFの作戦が夜に行われたことを表しているのだと説明してくれた。さらに、RPFの戦闘を再現する展示や、兵士たちの銅像もあった。こうした一連の展示は、RPFの活動に訪問者をシンクロさせ、親しみを覚えさせるもののように感じた。

ルワンダに到着してから、きれいな町並みや、先進的な社会システムを見ていた自分にとって、一種のプロパガンダのような展示を目撃してしまったことは、少し残念であった。

展示の最後に、ジェノサイドの終結や、ツチ族と穏健派フツ族の保護に尽力した方々を紹介するコーナーがあった。しかし、そこには多くの避難民を匿って、命を救ったとされる、ポール＝ルセサバギナの姿はなかった。疑問に思い、ガイドの方に質問したところ、彼は称賛に値しないということであった。それは、彼が避難民に対して宿泊費等を要求したり、フツ族過激派まで招き入れたりしたからだそうだ。これが真実にしろそうでないにしろ、私にとって衝撃的であった。なぜなら彼は国際的に広く評価されているからだ。ルワンダ国内と国外で同じ人間に対する評価がここまで大きく変わることに驚くと共に、異なった文化的背景を持つ者との相互理解という道の険しさを改めて思い知らされた。



# JICA ルワンダ訪問

担当者：佐藤美知瑠

## 概要

日時：8月10日

場所：JICA ルワンダ事務所

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

## 目的

ルワンダは、「VISION2020」という中長期国家開発計画を掲げている。

そして、JICA は、以下の4つの観点から、支援を行っている。

1. 経済基盤整備(広域インフラ)
2. 農業開発(高付加価値化・ビジネス化)
3. 社会サービスの向上(安全な水の供給)
4. 成長を支える人材育成(科学技術教育・訓練)

日本とルワンダの両国の関係や今後の国際協力について学ぶ。

## 内容

JICA の事業内容説明

JICA ルワンダ事務局長高田氏との意見交換

## 感想

開発が進んでいるルワンダでの日本の認知度は低いというお話を伺った。ABE イニシアティブでは4年間で36名が日本への留学を経験している。ルワンダは、ICT 推進を国家政策の優先事項の1つにしている。ICT 分野での支援を通じ、日本との関係を更に強化できればよいと感じた。

JICA という開発援助に関わる方のお話を聞くことで、現地学生のディスカッションとは違う視点から、日本とルワンダの関係を考えるこ

とができた。

文化や考え方が異なる国で信頼関係を築くには、「You must~」「You should~」というように命令するのではなく、現地住人の立場に立って考えることが必要である。

Donnership ではなく、Partnership を結ぶことが求められる。一方的な支援でなく、現地住人のニーズを調べるためにも、現地住人と共に考え働き、同じ目線に立って考えることが大切であるというお話を伺った。

相手の文化、考え方を尊重し、理解すること、すなわち「相互理解」を今回の JICA ルワンダ事務所訪問で強く感じた。



(集合写真)

# ウムチョムイーザ学園

担当者：藤井恵、  
IGIRIMBABAZI Daniel

## 企画概要

ルワンダ国内で唯一、情操教育が導入されている Umcho Mwiza School を訪問し、ルワンダの教育の現状についてお話を伺った。

## 企画目的

国の成長の基軸となる教育が、ルワンダではどのように取り組まれているのかに興味を持ち、この企画を提案した。始めに今回訪問した、ウムチョムイーザ学園について簡単に紹介する。この学園は、首都のキガリ市内にある私立小学校で、2002年に日本 NPO「ルワンダの教育を考える会」の永遠瑠・マリールイズさんと現地の NGO によって設立された学校機関である。この学園は、ルワンダ政府や宗教団体から独立した独自の教育プログラムを運営しており、現在幼稚園生と小学生併せて 210 名が在籍している。

## 活動内容

渡航した 8 月はルワンダでは夏休み最中だった為、校舎の見学とボランティア職員の齊藤照子さんからお話を伺った。この学園の最大の特徴である「情操教育」とは、道徳や芸術、宗教などの社会的価値をもった感情や意志を養うための教育、つまり「心を育てる教育」であると言われている。発展途上国では想像力を養うこうした教育に遅れを取っており、ウムチョムイーザ学園に入学したばかりの生徒も、お手本の絵を真似することは出来るが、自分で自由

に絵を描くことが出来ないそうだ。そこで、キニアルワンダ語、英語、フランス語、算数等の通常の授業の他に、図工や音楽の授業も取り入れ、豊かな表現力を育てる為のカリキュラムを行っている。また、学園には日本から届けられたハーモニカや本が使用されている。

ボランティア職員の齊藤照子さんは、2012年に 74 歳でルワンダに移住し、この学園で子供たちに音楽を教えている。「違いを認め合い、一緒に乗り越えて乗り越えて共に生きていく」ことをライフテーマとしており、現在「Amahoro Project」にも取り組まれている。Amahoro とはキニアルワンダ語で平和を意味し、今回の第 16 回日本ルワンダ学生会議事業報告会のテーマに採用されている。

## 感想

今回ウムチョムイーザ学園を訪問し、給食や運動会等日本の教育システムが取り入れられている事に驚いた。また、齊藤照子さんがキニアルワンダ語や英語を上手く話せなくても、表情や身振り手振りを使って子供たちと等身大の姿で向き合うことによって、「(子供たちにとって) 生きたおもちゃになる」と話していた姿がとても印象的だった。今後、この学園の卒業生が現在どのように活躍しているのかについて注目したい。





# カリソケ研究センター

担当者：Nadia Niyonizeye

文責：西野由花

## 企画概要

日時：8月11日

場所：カリソケ研究センター

参加者：カリソケ研究センタースタッフ、日本ルワンダ学生会議メンバー

## 企画目的

本企画の目的はルワンダにおいて貴重な観光資源であるだけでなく、神聖な存在として扱われているゴリラの現在の様子や、ルワンダでどのように扱われているのか、ルワンダの自然科学分野での研究の様子などを知ることである。ルワンダにおけるゴリラ観光は人気であるが、その背後で絶滅危惧種であるゴリラの生態を保護するカリソケ研究センターの功績を日本・ルワンダの学生が共有することで自然界と人間界との共存を考えていく。

## 企画経緯

昨年夏に日本で行われた本会議の企画として、しながわ水族館で生物多様性をテーマとした企画が行われた。当時水族館を選択した理由は、内陸国であるルワンダでは海は遠い存在であり、同時に海の生き物も遠い存在であるため、日本では彼らとどのように共存しているのか、また海洋生物の生態はどのようなものであるのかを伝えたいと考えたからである。

当時の企画に実際に参加したルワンダメンバーとして、企画担当者のNadiaは自身がインターンシップを行うカリソケ研究センターにて、ルワンダの人々にとって身近な存在である

ゴリラと人間のかかわりを日本人メンバーに伝えるため、この企画を提案した。

私たちにとって新しい視野をもたらすものとなった。

## 活動内容・報告

当日はカリソケ研究センターのある Musanze までバスと徒歩で移動し、カリソケ研究センターにて担当の方とお会いした。

その後ゴリラの基礎知識や過去から現在に至るゴリラ研究の進展、そして現在観察を行っているゴリラの群れの様子など、研究の成果等をスタッフの方から伺った。



(カリソケ研究センター前にて)



(カリソケ研究センター内)

## 感想

ルワンダのキガリは非常に発展した都市であり、ジェノサイドの歴史の他にドローン施設や ICT 教育などルワンダの技術的発展について学んできたが、カリソケ研究センターでは一転、ルワンダの自然について学ぶ貴重な機会となった。

カリソケ研究センターはゴリラの他、ルワンダの地に暮らす野生動物の観察、研究を行っている。驚いたのは、国境にまたがって生活しているゴリラの群れをウガンダなど他国と協力して観察していたことだ。絶滅が危惧される種もあるゴリラであるが、動物園ではなく自然の中で生きるゴリラたちと、彼らの種の存続のために尽力するルワンダの人々との共存の形は

# 文化交流パーティー

担当者：佐藤美知瑠

## 概要

日時：8月13日

場所：Café Neo

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

ご来賓：

- 駐ルワンダ日本大使 宮下孝之様
- Ambassador Dr. Charles Murigande, Deputy Vice-Chancellor in charge of Institutional Advancement in University Rwanda
- Mme Marie Louise Towari Kambenga, President of NPO Think About Education Rwanda
- 同 NPO アマホロプロジェクトディレクター 斉藤照子様
- 在ルワンダ大使館の代表者様
- JICA ルワンダ支部の皆様
- ルワンダに在住、あるいは勤務している日本の方々 計 56 名

## 目的

日本ルワンダ学生会議は、「相互理解」を理念に掲げて活動している。

日本人大学生とルワンダ人大学生が、お互いの文化を知り、一緒に取り組むことで、より相互理解を促進する機会にしたいと考えた。

## 内容

1. 開会挨拶、日本ルワンダ学生会議の概要説明
2. ルワンダ人学生によるダンス
3. 日本人学生によるダンス(ソーラン節、オタ芸)

4. パネルディスカッション
5. ルワンダ人学生と日本人学生でダンス
6. ルワンダ国立大学学長挨拶
7. 音楽鑑賞
8. 在ルワンダ日本大使挨拶
9. ネットワーキング
10. 閉会挨拶

## 感想

様々な方のご協力を得て、文化交流パーティーを終えることができた。

日本ルワンダ学生会議の理念である「相互理解」を促進する機会になっただろう。

パーティーの前に、数時間、日本人学生とルワンダ人学生でお互いの国のダンスを練習する時間を取った。練習時間では、ダンスに込められた意味を話しながら、練習を行った。ダンスという一つのものを作り上げていくことが、「相互理解」に繋がっていると感じた。

育ってきた文化が異なっても、その文化を理解するという気持ちを持つことが必要だと感じた文化交流パーティーであった。



(集合写真)



(両国学生のソーラン節)

## 第3章 学生会議活動報告

学生会議 概要

日本側プレゼンテーション

日本人の特徴

「What's your dream?」

日本の小学校における英語教育  
異文化理解 ～違いを乗り越えて～

Future of JRYC

ルワンダ側プレゼンテーション

Car Free Day

UMUGANDA

ルワンダと観光

Strength of Rwandan Women

## 学生会議 概要

# ABOUT STUDENT CONFERENCE

### 実施日

2017年8月

### 活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれ興味・関心がある分野や社会問題などからトピックを決め、プレゼンテーションを行い、そのトピックに関連したディスカッションや意見交換を行う。

### 活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なテーマについて深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

### 活動成果

1. 互いの国に対する深い理解
2. 異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い。
3. 団体の将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論。



# 日本人の特徴

発表者：海老原峻

日時：8月6日

## 概要

日本人の特徴を紹介した。「恩」や「恥」といった日本人特有の内面的特徴や、宗教観などに関して発表した

## 目的

当団体の基本コンセプトの一つである「相互理解」を達成するための手助けになるような発表をしようと思った。特に、ルワンダ到着直後であったので、両国の学生間において一種のアイスブレイクになることも期待した。

## 内容

### ①恩の概念

西洋において、親切は無償であるほど有難いと思われるが、日本ではあまり好まれない。なぜなら、一方的な親切をされると、メンツがつぶれると考えているからだ。

### ②恥の概念

日本人は、恥をかくことをひどく嫌う。同時に、悪事を働いてもそれが表沙汰にならなければ恥じる必要はない、という「恥の文化」の元で生きている。一方で、西洋人は、全く逆の「罪の文化」に支配されている。日本では、失ったメンツを取り戻す最良の方法として自殺が選ばれやすい。

### ③都会で生きること

日本人は特に都会で生活することを好む。なぜなら日本人は孤独を嫌い、集団でいると安心するからである。これは、日本が島国であり、かつて鎖国政策を行っていたため、集団で（特に日本人同士）でいることが好きなのだ。欄間や障子も他人の存在を身近に感じていたい日本人に好まれるようにできている。

### ④日本人の楽しみ

風呂…日本人は裸になることを躊躇わない  
和食…見た目も重視  
酒…唯一羽目を外しても許される時  
睡眠…日本人はどこでも眠る  
恋愛…源氏物語の例

### ⑤日本の宗教

神道、仏教、儒教、キリスト教などの様々な宗教を選択的に取り入れてきた稀有な例である。日本がほぼ単一民族国家で、島国であるため、宗教を抛り所として統一を進める必要がなかったことが、これを可能にした。同時に、特定の宗教の熱心な信者は少ない。

## ディスカッション

日本人の学生に対しては「紹介した特徴に同意するか」、ルワンダ人の学生に対しては「紹介した特徴に関して、共通点、相違点はあるか」というテーマで話し合った。

日本人の学生の意見…「恩に関して、あまり深刻に考えたことはない。友達同士であれば気にしない」、「上京するのは、都会がかっこいいから」、「自分も宗教にあまり



熱心ではない」、「外国人に話しかけられると、身構えてしまう」など

ルワンダ人の学生の意見…「恩に関しては西洋寄りの考え方をしている」、「1人になりたいときもある」、「自分はキリスト教を信じている。両親は特に熱心なクリスチャンだ」、「風呂の文化は興味深い」、「源氏物語に見られるような不倫を美化する風潮は良くないと思った」など



## 感想

ルワンダの学生にとって、恩や恥の文化を理解することは難しいようだった。質問を受け、もう一度説明したが、納得していないようだった。もう少し多くの時間を割いたり、違う内容にしたりすべきであったかもしれないと反省している。

恩は親しい間柄にある人間になされるものは負担が少ない、と話した時に、「友人とは何か」という質問を受け、自分だけではなく全員で考えた。「困ったときに助けてくれる人」、「お金の貸し借りをしない人」などの意見が出た。意義深い話題について話し合うことが出来たと思う。

特に宗教に関して関心を示してもらった。ルワンダ人には敬虔なクリスチャンが多い分、宗教に比較的無関心な日本人の姿勢に違和感を覚えていたようだ。このトピックは発表して良かったと思う。

全体を通して両国の学生間において、活発な意見交換が出来たと言えるだろう。相互理解、アイスブレイクという当初の目的は概ね達成できたと思う。

## 「What is your dream?」

発表者：佐藤美知瑠

発表日：8月8日

### プレゼンテーション概要

個人の夢を紙に記載し、その後、内容についてグループでシェアを行った。

最後に、全員で夢を書いた紙を持って記念撮影を行った。

### 実施目的

「夢」というテーマを通して、文化や育った環境が異なる同年代の大学生がどんなことを考えているか、どんな将来を描いているのかを知る。

### 内容

個人の夢を紙に記載し、その後、内容についてグループでシェアを行った。

最後に、全員で夢を書いた紙を持って記念撮影を行った。

### 感想

メンバーが楽しそうに、また真剣に夢を書いていた姿が印象的であった。

日本人メンバーは「My DREAM is to become a famous Japanese & make friends over 100 countries」や「My dream is to solve the problem which is rised by cultural difference」といったものや夢や、ルワンダ人メンバーは「Become a

network administrator」 「My dream is to travel to every continent!」という夢を書いていた。

大学生になると、夢というテーマで話をすることも少なくなるからだろうか、最初は少し悩みながら書いていたメンバーも、最後には笑顔で夢をシェアしていた。

これからの世代を担う若者同士で、夢についてシェアできたことはとても有意義であった。



メンバー全員での記念写真

# 日本の小学校における

## 英語教育

発表者：藤井恵

発表日時：8月8日

### プレゼンテーション概要

日本の初等教育に焦点を置いた英語学習についてのプレゼンテーション、及び英語教育においてどのような学習方法が取り入れられるべきかについてディスカッションを行った。

### 目的

今日、日本とルワンダの両国で英語の需要が高まってきている。

日本では近年グローバル化が加速し、ヒト・モノ・カネが国境を越え流動的に動く社会の中で、国際競争で生きる日本人の人材育成が重要視されている。そして、異なる考え方や意見を持った相手の話を聞いて理解し、自分の意見を伝えることが出来る「グローバルリテラシー」の習得が求められている。それゆえ、世界共通語である英語の早期教育は国家戦略として取り組むべき課題であり、2020年からは小学3年生から外国語活動が始まる等、現在様々な授業改革が行われている。(文部科学省 HP)

一方、ルワンダでも2008年より英語が公用語に追加され、英語教育の強化が急速に行われている。その理由の一つとして、国際貿易の推進がある。主な貿易取引国である、隣国のウガンダ、ケニア、タンザニア

等はすべて英語を公用語としており、同じ言語を使用することは取引拡大の機会に繋がる。それだけでなく、英語が公用語である事はアメリカやヨーロッパ、アジア等その他の海外の投資家を誘致する際に大事なメリットになりえる。またもう一つの理由として、これからルワンダがアフリカのIT立国として成長する為に、世界共通言語である英語を国民全体が身に着けることは国家成長に役立つと考えられているからである。(the guardian, npr)英語の公用語化以後、街中の多くの看板がフランス語から英語に取り換えられ、また日本と同様に小学校から英語学習が導入されている。

しかし、日本とルワンダ両国において英語は第二言語であり、両国の英語教育には依然として様々な課題がある。今回は日本の英語教育の焦点を当てて考えることで、どのような英語学習が両国で有効であるかを考えたい。

### 内容

#### ①英語教育の必要性

英語を学ぶ利点の一つは、視野が広がり様々な価値観を知ること、より柔軟な考え方を身に着けることが出来る点である。英語が話せると色々な国の人と交流が出来るようになる。そうした中で、日本と異なる文化や考え方をすることは、今までの固定概念だけに捕らわれずに、より広い世界観を持って多面的な考え方をすることが出来る。また他にも、英語を学ぶことは将来の可能性を広げることにつながる。近年グローバル化が進み、仕事の活躍の場が国内だけでなく海外にも広がってきている。英

語力が求められる業務も段々と増加しており、英語を話せることは自身の学業や職業の選択肢を広げることに役立つ。

### ②早期学習の利点

では、なぜ英語の早期学習が求められているのか？それは子供の方が第二言語の習得が大人よりも優れているからである。言語習得と年齢の関係性は科学的に証明されており、言語習得における脳の発達のピークは12、13歳と言われている。(Lenneberg) その時期以前に第二言語の学習を開始した方が習得速度が速い。また、年齢が低い程が、より柔軟に言語に適応出来ると言われている。その為に、こうした初等教育から外国語に触れておくことは、新たな言語習得に役立つ。

### ③現在の日本の英語教育の課題

しかしながら、日本の英語教育の方法にはいくつか疑問を感じる。まず、実践的な会話の練習よりも英文法の学習に時間を多く当てている点である。こうした学習方法は、「使えない英語」の教育であり、生徒に英語学習の必要性を低下させ、試験の為だけの英語学習につながる。ベネッセの調査によると、現在英語学習を開始する中学一年生の6割が英語に対して苦手意識を抱いている。

また日本ルワンダ両国が共通して抱える問題として、教員の確保がある。英語圏に留学経験のある等英語を十分に教えられる人材は両国において不足しており、言語として英語を教えるのならば、これから改善すべき課題である。

## ディスカッション

英語教育において、どのようなことが重視されるべきかについて議論をした。多く出た意見としては、会話の時間を増やすことだった。ルワンダでは学生同士は普段からケニアルワンダ語と英語を混ぜて話す。また高度な英単語を使うのではなく、基本的な単語を使って会話をしており、国民全体が総じて話せる事を目的とした英語教育の姿勢が見受けられた。また、日本で外国人に質問された際に、身振り手振りも交えて答えた結果英語が伝わり喜びを感じたという意見もあった。このように決して話す事が得意でなくても、積極的に話して伝わることの達成感を知ることが外国語上達へ最も有効的な学習方法だと思う。

## 感想

自分自身は幼少期に英語圏で過ごした経験から、教科としてではなく、国を超えて人々をつなぐコミュニケーションツールとしての英語に接していた。それゆえに、今回のルワンダ渡航でも、現地の学生と様々な話題に対して深く話し合えたと考える。このように英語を使えることは自分自身の活動の場を広げることが出来る。だからこそ、試験で結果を出すことを目的とした「知識の詰め込み型」学習ではなく、たとえ流暢に話せないとしても、積極的に挑戦して伝わる喜びを知ることを体験する学習が一番大切なことだと再認識した。これから2020年の東京オリンピックに向けて英語を使用する機会が日常生活でも増えると考える。それに向けて、会話を重視した「使える英語」の教育が進むことを望む。

## 参考資料

・ English to Become Official Language in Rwanda

<http://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=97245421>

・ Why Rwanda Said Adieu to French

<https://www.theguardian.com/education/2009/jan/16/rwanda-english-genocide>

・ 小学校における英語教育の現状と課題

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379938.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379938.htm)

・ ベネッセ教育総合研究所「調査データクリップ！子供と教育」

<http://berd.benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/index4.html>

・ Eric H. Lenneberg, “The Biological Foundations of Language”

## 異文化理解 ～違いを

### 乗り越えて～

担当者：阿部理

日時：8月8日

#### 概要

私自身の中国留学での、「フリーハグ」という活動を紹介した。日中友好を掲げて行なったこの活動を通して、違いを受け入れて乗り越えることについて私自身模索した。そこで得られた考えを、共有し、ルワンダ人達の考えを聞いた。彼ら自身、民族の違いを乗り越えているので、大変興味深かった。

#### 目的

違いを乗り越えて、異文化を理解し、相互理解するということは、この団体の理念にも繋がる。私自身学生時代ずっと考えてきた、テーマが日中関係であった。この本質は、異文化の対立を乗り越える事である。ルワンダも民族対立を乗り越えてきた歴史がある。そのルワンダ人達から、どうすれば異文化の違いを乗り越えられるかを学び、皆で平和について考えるため。

#### 詳細

私自身の中国留学でのフリーハグでの話をした。当時、日本と中国の関係は、決して良いものではなく、お互いの国民通しがお互いの国に対して、ネガティブな感情を抱いていた。私、自身も中国に対していいイメージがなく、むしろ嫌いであった。けれど、実際に中国に行ってみる事でそのイメ

ージが変わった。フリーハグという活動を通して、異文化を乗り越えて、相互理解するためには、実際にあって話すことが重要だと気づいた。知らない人通しだと怖いのが、知ってしまえば、怖くないし、顔が見えるリアルな関係になる。違いにばかり着目するのではなく、同じ人間であるので、心が通じ合うことができると、フリーハグを通じて学んだ。その事を、エピソードを交えながら、皆に共有し、自分の考えを述べた。それを踏まえて、みんなの考えを聞いた。ルワンダ側からの意見も活発に出て、非常に興味深かった。

### ディスカッション

積極的に様々意見が出た。特に印象的な質問が、現場に行くことはもちろん大切なのであるが、ルワンダやアフリカでは、そのようにした場合、命の危険にさらされることがある。それでも、現場に行くべきなのかという質問だ。もちろん、自分で命を守るのは大前提である。私が、答えに詰まっていると、ルワンダ人学生が次のように述べた。相互理解のためには「勇気」が必要だ。現地に行く、一歩踏み出す「勇気」である。私の経験上でも、行く前は怖くても、実際に顔を合わせて話せば、顔が見えるリアルな関係になるのだ。知らないで、想像で話すことが一番怖いのだ。

### 感想

今回、ルワンダ人達とディスカッションするにあたり私にしかできないプレゼンをしよう意識した。そうした時に、自らの経験と、本団体の理念が合致すると考え、フ

リーハグのプレゼンをした。ルワンダ人学生も最初は笑っていたが、その本質に気づくと真剣な表情になった。まさに、私が聞き出したかったのは、ジェノサイドに対する彼ら自身の言葉なのである。20年前の悲しい過去を乗り越えた彼らの本音を聞いたかったのである。実際話して見ると、真剣に自らの考えを話してくれ、私が逆に応援されて、彼らの真摯な姿勢に胸を打たれた。ルワンダには魅力的な学生がたくさんいる。きっと素晴らしい国になるであろう。

# Future of JRYC

発表者 眞鍋悠眸子

発表日時：8月14日

## プレゼンテーション概要

日本ルワンダ学生会議をより多くの人に広めることで、日本においてルワンダが、ルワンダにおいて日本がもっと身近な場所であることを感じてもらうのが本団体の目標である。そこで、私たちが活動をするためには、団体の財政面での安定は欠かせない。次回の日本で行われる本会議により多くのルワンダ人メンバーが参加できるように、どのような方法で費用を準備すべきか、両国の学生が意見交換を行った。

## 実施目的

私たちはボランティアをしているわけではない。日本人とルワンダ人が平等な位置に立って「相互理解」することが私たちの理念である。だから、財政面でも両国にメンバーに負担の差があってはいけないと思うし、それは私たちの理念に反していると考える。また、特に日本側は、新入生を大いに募集している。より多くの学生が本団体に参加し、継続することで、より広くルワンダについて知ってもらう活動ができる。しかし、学生にとって金銭面の支出は容易ではない。本団体が財政的に安定することは、私たち全員にとって大きな課題である。

加えて、本団体の財政面の不明瞭な部分を学生会議に参加した全員が理解すること

もひとつの目的である。ルワンダでの第16回本会議の前に、日本側の会計担当として準備をしたが、お金の問題は全員に共通して重大な事柄であるから、メンバーと考えを共有しながら進めることが大事だと実感した。そのようにして、本テーマについての発表をする経緯となった。

## プレゼンテーション詳細

まず初めに、第16回本会議における内訳（航空券代、滞在中の食費、ワクチン、消耗品、雑費、助成金）を皆に見てもらった。これは、日本人もルワンダ人も、どれだけのお金がかかっているのかを正確に把握できるように、日本円とルワンダフランで示した。

次に、第15回本会議においてルワンダメンバーを日本へ招致したときの資金調達の方法、そしてその内訳を示し、次回の本会議についての資金面での問題提起を行った。具体的には、本会議メンバーの個人的な費用負担をどう減らすかである。なぜかという、個人の負担が重いことで、活動を続けられなくなってしまったり、参加加入を躊躇する新入生がいることを考慮してのことである。日本、そしてルワンダという国をよく知ってもらうという目標の達成のために、メンバーの増員は必須である。そうして、具体的にどのように資金集めをし、利用するかを皆で考えた。実際、今までの本会議においていくつかの案は出ていた。例えば、ルワンダコーヒーを日本で売ること、まれにくる日本語→キニヤルワンダ語の翻訳業務、現在あるOB・OG基金を、日本ルワンダ会議の知名度を上げる目的も

兼ねてクラウドファンディングとして公の活動にすること、などである。これらを実際に行うにはどうすれば良いのか、他に案はないかなどをディスカッションにおいて話し合った。

## ディスカッション

- ・ 翻訳業務は依頼が来次第始めることができると思う。
- ・ 日本語以外でも、ルワンダ人メンバーには英語やフランス語が得意な人がいるので、ほかの言語の翻訳業務もできるかもしれない。
- ・ 日本語→英語→キニヤルワンダ語という作業になり、複雑であるのと同時に、私たちは学生であるから、ミスをする可能性はいつだってあるし、翻訳を依頼してもらう人から信頼を得られるかが問題。
- ・ ミスを減らすためにも、日本・ルワンダ間の密な連絡が必要。
- ・ ルワンダコーヒーについては、日本において売る場所は学校祭など、候補が考えられるが、難しいのは運搬方法である。団体の資金調達のうちの一つである活動のために、大掛かりな輸入方法をとるのは現実的でない。
- ・ 日本とルワンダをよく行き来する人をお願いする方法もある。
- ・ クラウドファンディングは、ほかの学生団体が成功しているし、本団体を広めることもできることも考えると、やってみる価値はありそう。
- ・ クラウドファンディングについての知識がないから今判断することはできない。本会議後、両国それぞれのミーティングで担

当者を決め、期日を作り、リサーチを行うのがいいと思う。このためにも密な連絡が欠かせない。

## 感想

お金の事情というのはとてもシビアなものである。これは途上国支援をする団体であつたらどこにでもある問題だと思う。一方、私たちはルワンダを「援助」したことはない。それでも、やはり物価の差は存在するし、日本の学生であればバイトしてお小遣いを稼げるところ、ルワンダ人はそもそも仕事口が少なく、親からもらうお小遣いも限られているという事情がある。相手を理解しあうことが理念だからと言って、全てを平等にとは、やはり難しいのでは、と私は思っていた。しかし、議論の様子からうかがえたのは、日本人もルワンダ人も、皆が現状を改善したい、という思いをもって意気込んでいたことである。「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるべきだ」という言葉のように、「与える」援助によって、「与えられる」ことに慣れてしまうという良くない面があるかもしれない。しかし、ルワンダ人メンバーの中にそんな姿勢は全く見られなかった。そして、彼らの心はもう発展途上国ではないのだな、と感じた。

事前にもっと情報を用意してプレゼンに臨むべきだったところが反省点であるが、みんなで一緒に考え、議論する時間を設けられたことは、これからもよい関係を続けていくうえでとても有効であつたと思うし、最後の学生会議として有意義な時間が過ごせたと思う。



# FUTURE OF JRYC

発表者：原一生、西野由花

発表日時：8月14日

## 概要

本プレゼンでは最初に目的を提示し、内容では広報活動、本会議外における日本人とルワンダ人との繋がり強化、さらには本会議における資金運営のことで取り上げた。その中でも私は広報活動を担当し、広報活動の重要性を述べ、日本側が取り組んでいる広報活動と日本とルワンダ間のイベントのことについてプレゼンテーションを行った。

## 目的

意見交換を通して団体運営におけるお互いの問題点の発見、改善を図り団体の発展につなげる。

## 内容

広報活動が重要であるという文脈では、今の団体の規模では満足と言えるほど効率的に団体運営が行えているとは言えないので、個人の負担を減らす、また活動の範囲を広げるためにも広報活動は必要不可欠であるということを説明した。次に当団体が広報活動の一環として出張授業、新歓、そしてWAVOCのイベントなどに参加していることを提示した。そして日本側は多様性を重視しているため早稲田大学の学生だけでなく様々な大学の学生を募集しているため、ルワンダ側も1つの大学出身者のみを募集す

るのではなく、他大学の参加も許可してはどうかという提案をした。

## プレゼンテーション詳細

今回、私の学生会議ではより多くの意見交換を行うことで互いが真にこの団体へ求めていること、互いの国へ伝えたいことを話し合うことで内部の齟齬をなすことを目標とした。相手の求めることを知ることで今まで気がつかなかった分野でも互いに協力し合いながら団体運営を行なっていくことができるようにすることが、今回私の目指した学生会議である。

テーマは、「相手に国に本当に知ってもらいたい自分の国のこんなところ」として、3つのグループに分かれてディスカッションを行った。

日本側からは、アジアといえば中国のイメージが強いルワンダに、より日本を身近に感じてもらいたい。ルワンダ側からはもっと日本人にルワンダの魅力を知ってもらい、特に観光に来て欲しい。といったような意見が上がっていた。

## 感想 1

この日本ルワンダ学生会議が始まったきっかけは、現地に視察に行った際に現地のルワンダの人に言われた「もっと私たちのことを知ってほしい」という言葉であったと先輩から伺った。そして、ルワンダ学生、ひいてはルワンダに暮らす人々との相互理解が私たち団体の目的である。しかしながら近年は互いの地に訪問し合い、それぞれが互いの国について考える機会は多くある

ものの、相手がこちらに望むものについて話し合う機会が少なかったように思い、このテーマを企画した。

実際、話してみると観光地としてのルワンダを広めてほしいなど、今までとは違った視点での活動を広めることのできるような回答が生まれた。このディスカッションが互いに対するより深い理解や今後のより幅広い活動の一助になれば嬉しい。

## **感想 2**

私個人としては、現地で過ごす中で、この団体の存在意義はルワンダのありのままの姿を日本社会に発信することであると思ったのもっと団体の活動を広げるためにも団員を増やすことが重要課題なのではないかと考えていた。だから FUTURE OF RWANDA では広報活動のことについて話そうと決めたのである。そのためにはもっとルワンダのことについて知る必要があるし、もちろん今後のルワンダとの交流も大切にしなければならなかったのである。

## Car Free Day

発表者 : Daniel IGIRIMBABAZI

キガリカーフリーデーは、キガリ行政が月に一度行うイベントである。毎月の第一日曜日に、市民は車を動かさず、市内の道路でスポーツ活動に参加する。

キガリ行政によると、このようなイベントを行うのには分けると主に 3 つの効果があるという。それは、健康への効果、環境への効果、そして社会への効果である。

- 健康への効果

キガリカーフリーデーの間は、様々な医者や医療者が参加者に健康診断をして下さり、健康を維持するためのアドバイスも下さる。最近の 3 回で言うと、8000 人を超える人々が、心臓発作、発作、がん、喘息、そして糖尿病などのテストに参加した。

- 環境への効果

このイベントの間はほとんどの車が使われていないため、排気ガスの削減に貢献する。

- 社会への効果

市民は様々な人と出会い触れあうことで、強く大事な関係性を築いていく。

それに加えて、カーフリーゾーンというものもある。これはキガリ市内の中心に設けられたもので、歩行者が市内を楽しめ、また美しさと新鮮な空気のための緑の空間が確保できていて、展示会や、スポーツ、メディテーションそして無料 Wifi へのアクセスなどに使われる。

プレゼンテーションの間に出た質問への答え :

- キガリカーフリーゾーンには、救急車など特別サービス車以外は、ガスを排出する車はいない。
- キガリは、市の中心での歩行者ゾーンをもとに、東アフリカの首都になるという目標を掲げている。
- このようなイベントへの市民の反対は大変少なく、それは例えば、救急車が通るのが遅くなる可能性のあるため、通行可能な道路を市の離れたところに移すべき、などという意見である。
- キガリカーフリーデーは 2016 年 5 月に始まった。
- 午前 7 時から始まり、正午に終了する。
- カーフリーデーの間には、車を使用する人々には他のルートが事前に整備、確保されていて、他の活動を阻害しないようになっている。
- この日に関する情報は [www.kigalicity.gov.rw/carfreeday](http://www.kigalicity.gov.rw/carfreeday) で確認できる。

## UMUGANDA

発表者：ISHIMWE Peace Diane

UMUGANDA は、国の発展に貢献することを目的とした社会的な働きである。またそれは、事例を解決するために公共の法廷に集まったりするなど、コミュニティーの人々が共通の目的で集まっていた前植民地時代にまでさかのぼるような伝統的な行事である。

UMUGANDA は毎月最終日曜日、午前 8 時から 11 時まで行われ、コミュニティーがいくつかの公共行動を行うために集う。

法律で、18 歳から 65 歳までの健康な全ての人はボランティア活動に参加することが期待されている。

UMUGANDA の間にできる活動はいくつかある。

1. 荷物整理
2. 学校建設
3. 植樹活動
4. メモリアル施設の掃除
5. 貧困層の方々の家の掃除 など

三時間ほどの活動の後コミュニティー全体で、自分にも影響がある地方の、また国の事例を議論するミーティングを開く。プレゼンテーションの後、メンバーは UMUGANDA が全体的にどのようにコミュニティーのためになるかを考え、その効果をより大きなものにするには何を加えれば良いかについて議論した。

日本側のメンバーは、日本の生活様式ではこのようなことはできないため、なぜルワンダでは可能なかと不思議そうであった。また、ルワンダの若者は 18 歳になると

UMUGANDA に対して特別な責任を感じるのかという質問も出た。ルワンダ側のメンバーは、UMUGANDA は、その必要性の理解、またコミュニティーや属性の感覚が人々の間であるから可能なのだと答えた。若者を含む誰もが自分にも関係しているという風に考えていると説明した。また、2015 年の一年間で UMUGANDA の間に行われた活動はルワンダフラン 190 億分にも上ると付け加えた (US ドル 2500 万)。

## ルワンダと観光

発表者：Lucky BARAHEBUZA

ルワンダ人は、自国の美しさを知るために、観光名所を訪れたり、冒険に出る習性がない。そういうことは外国人向けであると考えているからなのだが、ルワンダ政府は保護地域の豊富な多様性の保護を促進し、全てのルワンダ人のためになる持続的な観光を発展させていきたいと思っている。そのためには、高いクオリティを誇る第一のエコツーリズムの目的地であり、また負う条件と暖かい迎え入れのために、中央・東アフリカでの地域会議や会合の開催地であることを目指している。

・どうすれば達成できるか：

RDB（ルワンダ発展会議）によって様々なキャンペーンが行われてきた。その一つがルワンダ人に自分たちの国をもっと探検するよう薦める *Tembera u Rwanda* で、有償ボランティアや、ルワンダ中の観光地を無料で旅できる運が良い人たちがバス旅行に行く。これによって人々のルワンダの観光についてのイメージも広がり、外国人にもっとオープンになる。その上、ルワンダはこの目標達成のためにインフラ整備を行っている。

・観光地：

- 北部地方の Volcano National park
- 西南地方の Nyungwe National Park
- 東方面のキブ湖
- 博物館：

Ethnographic museum

National art gallery

King's Palace museum

Presidential palace

Natural history museum

Museum of environment

National Liberation Park at Mulindi

Campaign against Genocide museum  
at Kigali

## Strength of Rwandan Women

発表者：Philemon MUGISHA

このプレゼンテーションあと、私たちは「女性は本当に憲法を作る場にいるべきかどうか」ということについて議論した。ここではルワンダの議会におけるより大きな女性の割合というのを例に取った。

二つのグループに分かれた。(賛成と反対)

賛成派は、議会に多くの女性がいることできちんとした企画や性に基づいた効果的な判断を可能にし、判断を下すのが男性にしる、女性にしる、だれもが自分も一員であるように感じられると説明した。

一方反対派では、議会により多くの女性を入れることは国の発展を減速させるだけだという意見が出た。多くの女性は子供の面倒を見るのに多くの時間を割くため、課題をこなす時間が十分でない。また、多くの女性は相手の男性を怖がるため、女性は男性の判断を、それが間違っているから拒否するのではなく、夫が賛成しないから拒否するのだと言った。

数分の議論の後、もし国の発展のことだけを考えるのであれば、議会に多くの女性がいることには問題があるという結果に至った。しかし、人口について考えるのであれば、この大きな数は有利に働くということになった。

このテーマは、多くの議論が必要だ！

## 第 4 章 参加者感想

西野由花	青山学院大学国際政治経済学部 3 年
海老原峻	青山学院大学国際政治経済学部 2 年
眞鍋悠眸子	青山学院大学法学部 3 年
佐藤美知瑠	共立女子大学国際学部 4 年
阿部理	早稲田大学人間科学部 5 年
原一生	早稲田大学政治経済学部 2 年
藤井恵	国際基督教大学教養学部 4 年
上川伶	北海道大学理学部 2 年

Lucky BARAHEBUZA ルワンダ国立大学

Alain Philemon MUGISHA ルワンダ国立大学

Daniel IGIRIMBABAZI ルワンダ国立大学

## 第 16 回本会議を振り返って

青山学院大学国際政治経済学部 3 年 西野由花

まず初めに、今回の渡航に関してご支援を頂いた各助成金団体様、至らない私に様々なアドバイスを下さった小峯茂嗣教授と、卒業してからもお世話になっています当団体の先輩方、訪問させていただいたルワンダの各機関、施設の方々へ、厚く御礼申し上げます。今回の活動は、皆さまのご協力無くしては無事に終えることができませんでした。

前回の、私のよく知る日本への招致であった第 15 回本会議とは一変し、今回の第 16 回本会議では未踏の地、ルワンダでの学生会議を日本側代表として引っ張っていくことになりました。慣れない代表職の中、今回は外部から渡航に応募してくれた学生も参加するため、どのように日本とルワンダで本会議を作っていくか、当事者意識を持ってもらうか、用意不足なものはないかなど奔走した日々だったことを思い出します。そんな中で、全てのメンバーが協力的に動き、無事に本会議が終了したことをとても嬉しく思っています。

今回の渡航ではルワンダ側メンバーの協力もあり、様々な側面からルワンダという国やルワンダの人々をみる事が出来たと思います。ジェノサイドメモリアルでは、自身の家族にも関わる出来事であるのだろうと思うのに、私たちの質問一つ一つに対し真剣に答えてくれたり、訪問先へのアポイントや時間調整なども行なってくれました。また、ホームステイでは家族の方も暖かく私たちを迎えてくれ、ルワンダの人々の思いやり優しさに触れることができました。もちろん、食事の時に一緒に冗談を行ったり、写真を取り合ったり、化粧をしてもらったり、ダンスを教えあったり、短い渡航でしたが国という枠を気にすることのない友人関係を彼らと作れたと感じています。また、街中では多くのルワンダの人々に注目されたのも良い思い出です。見慣れないアジア人にルワンダの人たちは興味津々といった様子でした。そんな中、日本とは違い大人も子供も話しかけてくる人が多かったというのが印象深いです。ルワンダの人たちの好奇心強さ、懐深さが垣間見れた一瞬でした。また、そのような市井の人々と関わり合えるのも、現地ルワンダの学生達にコーディネーターしてもらったからこそ出来た貴重な経験なのではないかと思えます。

また、渡航で印象に残っていることとして、本会議後半に差し掛かったころ、日本人メンバーとカフェで食事をしていた時に今後の運営についての話になった時のことが挙げられます。もともと内部メンバーでいた学生も、「外部メンバー」として参加してくれた学生も、一緒になって団体の今後を真剣に話し合う雰囲気が自然と生まれていました。そして、外部メンバーであった学生も含めた全ての学生が、「今後も日本ルワンダ学生会議に関わっていきたい」と答えてくれたことがとても嬉しく泣いてしまったことは恥ずかしながらも大切な思い出です。私も含め、日本ルワンダ学生会議の学生の中には、団体に出会うまでルワンダという国に対して「ジェノサイドがあった国」、「アフリカの国」といったような認識であった人、そもそもアフリカやルワンダにそこまでの興味を持っていなか

った人もいます。しかし、実際の活動を通して、多くのメンバーがルワンダを好きになり、友人として今後も付き合っていきたいと考えるようになっていくことが、この団体の特徴でした。それが、外部から参加してくれた学生達にも同じように感じてもらい、またこの団体にも愛着を持ってもらえたことは、私の中で大きな意味を持っています。それが、違う文化を持つ人同士が分かり合い、尊重しあえるという確かな証だと思うからです。

私自身、ルワンダの学生達を日本に招致した時以上に、ルワンダの人々に触れ、ルワンダの文化や生活に触れることで人々の優しさ、真面目さ、衝突した時の真摯な態度に日々を重ねるごとに深い思い入れを感じるようになっていきました。現在、日本とルワンダの間にはまだまだささやかな交流しかありません。日本ではアフリカと聞くと身構えてしまう人も多く、親の反対で団体の活動としてルワンダ渡航することが叶わなかった日本ルワンダ学生会議メンバーもいます。しかし、私はこれから両国間の交流がより盛んになり、より良い友好関係が築かれていくことを願っています。

今年の夏、私がルワンダに行った友人達に伝えた時、友人達には決まって「ボランティアに行ったの？」と聞かれます。対等な関係作りは果たして奉仕精神から生まれるものなのでしょうか。私はむしろ、日本の人々にルワンダの現在の姿を広めることが、早稲田大学ボランティアセンターに所属する団体としての日本ルワンダ学生会議のボランティア活動なのではないかと渡航を通して考えるようになりました。私はこれから、ルワンダに行ったと言われた時には「良いね、観光に行ったの？」と言われるような関係作りがしていきたいと思っています。



# ジェノサイドに裏付けされる平和

青山学院大学国際政治経済学部 2年 海老原峻

## 【はじめに】

自分にとって今回がアフリカ諸国への初めての渡航であった。同時に、いわゆる途上国を訪れた経験も今回が最初となった。数々の特異な体験を経て、たったの2週間で自分の価値観は少し変わったと言えるだろう。本稿では、各訪問地の簡単な感想等と共に、自分がルワンダに興味を持ったきっかけであるジェノサイドに関して論じていきたいと思う。

## 【渡航記録・感想】

8/4(金)

成田空港のエチオピア航空の搭乗口に行くと、当然のことながら8割以上が黒人の客であった。日本で普通に生活をする限り、まず遭遇することは無かったであろう環境であり、日本にいながら異国情緒を早くも肌を感じ始めていた。機内は日本の航空機と大差はない。しかし、機内食をよく床に落とすなどスチュワーデスの対応がやや雑に感じられた。

8/5(土)

ボレ国際空港に到着し、初めてアフリカの地を踏むこととなった。空港の構造は一国のナショナルフラッグにしてはやや粗末であるように思った。空港にいる人種はほとんどアフリカ人と中国人であった。中華料理屋や中国語対応の案内カウンターがあり、中国の存在を感じざるを得なかった。トイレで歯を磨いている人が多かった。しばらくすると、かなり人が減った。ルワンダに行く人は少ないようだ。待合所で時間をつぶしていると、税関の男性が寄って来て、どこから来たのかを聞かれた。日本と答えると、北朝鮮のミサイルの話がされ、なぜか笑われた。アフリカにおける日本の認知度の低さを物語っているのかもしれない。

ブジュンブラを経由してようやくキガリ国際空港に到着した。ボレ国際空港と比べると、規模は小さかったが清潔感があるように感じた。空港の出口で、ルワンダ側の学生と初めて会った。とてもフレンドリーで親しみを覚えた。宿泊所までバスで移動をしたが、目の前に映るキガリの街並みに胸が高まった。

換金と物資調達のためにCity Centerへ行った。前日に行われていたルワンダの大統領選挙について現地の学生と話した。彼は、現職のカガメ大統領に投票したと言っていた。現地の政治事情について話をできて嬉しかった。

シティーセンターの入り口には厳重な警備がなされていた。キガリ市内の大きな建物の入り口には、大抵警備員が立っているのだという。手荷物検査もあり、ルワンダ政府の治安維持に対する努力が窺える。同時に厳重な警備は、それを要する程の国内情勢であることの裏付けでもあり、途上国としての一面も垣間見たように思う。

ルワンダで初めての夜を迎えた。昼間の和やかな雰囲気は一転し、不穏な空気が流れているように感じた。歩道にマチューテが置いてあるのが目に入った。

8/6(日)

週末はカーフリーデーと呼ばれる日にあたり、朝の時間帯は一部の道路で、自動車は通行止めになる。セントポールの前の道も、自動車の代わりにランニングをしている人が目についた。一般的には後進国として位置づけられるルワンダにおいて、このような環境と国民の健康に配慮した社会システムが存在することに驚いた。

ジェノサイドメモリアルを訪問した。同行した現地の学生の淡々とした口調でなされた説明が印象的であった。

道すがら、子どもたちに絡まれた。かわいいと思い他愛もない会話をしていると、突然「give me money」と言われ、凍り付いた。ルワンダ到着後、きれいな街並みを見て勝手に比較的発展した国だと思い込んでいたが、小さな子どもの一言で現状を思い知らされ、ショックを受けると同時に、自分の楽観的で短絡的なものの見方を恥じた。

初めてルワンダ大学を訪問した。休暇中のため、男子トイレは使用不可、女子トイレは水が流れない、という状況であった。日が沈むと、キャンパスは闇に包まれた。

8/7(月)

バス停にて大勢のバスの運転手に囲まれてややパニックになった。また、物売り、物乞いの人も寄ってきて、必死に生きている姿を目の当たりにした。

バスで3時間かけてニャンザに到着。キングスパレスにて、ルワンダの伝統文化について学んだ。かつてルワンダ王国の王が住んでいたという家に入ることができ、感動した。家具がほとんどないのは、ジェノサイド中に盗まれてしまったからだという。ジェノサイドの爪痕を垣間見た瞬間であった。

ブタレのPIASS 大学を訪問し、佐々木教授のお話を聞いた。ルワンダで赦しと和解のプロセスを実践する日本人の方と出会い、感動した。「外国人は仲裁者ではなく、当事者」としての意識を持たなければならないというお言葉が印象的であった。

8/8(火)

ルワンダで初の情操教育を実践する Umuco Mwiza スクールを見学した。3歳からパソコン教育が始まり、幼稚園でキニャルワンダ語、英語、フランス語、日本語を学び始めるという。また、図書室があり、色とりどりの絵本が並べられていた。子どもたちがのびのびと学校生活を送っており、日本の学校教育を再考する良い機会となった。

バスの中で、ルワンダ人の男性と話をした。彼曰く、自動車は日本製、日用品は中国製が多く、これから必要なのは医療技術、教師、自動車を修理する技術者であるということであった。現地のニーズを少しでも知ることができ、嬉しかった。

ホームステイでは、厚遇を受けた。シャワーは水しか出ないため、わざわざお湯を沸かしてもらった。手の込んだご飯もご馳走して頂き、感謝してもしつくせない。

8/9(水)

ムハンガの Zipline 社を訪問した。ドローンを使った輸血という日本にはないシステムに驚くと同時に、自国の改題を解決しようというルワンダ人の積極的な姿勢に感動し、自分も学ばなければならないと思った。

ルワンダ議会を訪問した。入り口でパスポートを一時的に没収されるなど、セキュリティの高さを感じた。展示内容は、議会の歴史というよりも RPF の活躍の歴史であるという印象を受けた。

8/10(木)

JICA のルワンダオフィスを訪問した。JICA の特長として「一つの組織として意思決定を行うことができる」という点について職員の方が言及されていた。つまり、トップの命令が現地で活動する職員にまで届き、かつ現地の職員の声がトップにまで届くということだ。この洗練されたシステムのおかげで適切な活動を展開することができ、JICA の評判は良いようだ。

Klab を訪問した。ここは誰でも自由に利用できる研究施設で、フリーWi-Fi も完備されていた。これは才能のある人を貧困という理由で腐らせないための施設である。一般的には途上国とされているルワンダにおいて、このような先進的な施設があることに驚くと同時にルワンダの求心力に感心させられた。

8/11(金)

ルヘンゲリのゴリラ研究センターに訪問した。野生のゴリラの保護を始めとする環境に対するルワンダの努力を目の当たりにした。人口密度の高いルワンダにおいて、野生動物と人間の間に緩衝地帯を設けることはかなり困難であるとのことであった。

ルヘンゲリにある建設中のショッピングモールを訪れた。車いす用のトイレ、スロープなど、バリアフリーの設備が印象的であった。

8/12(土)

House Peace Plaza 周辺の店でお土産を購入した。どの店も似たような品ぞろえであった。子連れの物乞いの女性に付きまといられる。

House Peace Plaza は City Center と同様、高級なショッピングモールであり、内装も立派であった。そこでは、現地人よりも外国人の方が目に付いた。

8/13(日)

文化交流パーティを行った。夜は日本食料理屋で食事をしたが、本場のものとは程遠かった。

8/14(月)

宮下大使の公邸にお邪魔させて頂いた。大使は気さくな方で、私たちの質問にも丁寧に答えて下さった。内装は豪華絢爛というよりは上品で厳かという印象を受けた。

8/15(火)

キガリ国際空港にて、一度バスから荷物と共に全員が下車させられた。セキュリティの高さが印象的であった。ルワンダの学生との別れを惜しんだ。

【おわりに】

今回の渡航を通じて、ルワンダに対する意識は大きく変わった。渡航前は、アフリカ大陸の中央に位置する一国に過ぎないと思っていたが、実際は「ただの」国ではないと分かった。首都キガリはもちろんのこと、地方に行ってもインフラは十分に整備されているようであった。また、治安は当局による努力の成果だろうか、想像を絶するほど安定していた。このようにルワンダが、暗黒大陸アフリカの一国としては特異な国に発展することが出来た要因としてジェノサイドが挙げられるだろう。

ジェノサイドが与えた影響には、光と影の両面が存在する。つまり隣人や親戚を信用できなくなってしまった、ルワンダからの亡命を余儀なくされた、などの負の影響がある一方で、良い影響もあるということだ。それは国内情勢の安定である。

他のほとんどのアフリカ諸国と同様、ルワンダは多民族国家（フツ、ツチ、トゥワ）である。こうした事実は、国家を統治する上で致命的な障害となる場合が多いが、ルワンダにおいてもこの事象は観察される。その最終的な帰結がジェノサイドである。ルワンダのジェノサイドと他国における民族紛争との差異は、ひとえにそのインパクトにあると言えるだろう。前者の残虐性は後者の度を超えていた。無論、これは強く非難されるべきことであるが、同時に「二度と繰り返してはならない」という教訓は非常に深くルワンダ人の心に刻み込まれた。したがって、ルワンダ人は自国の民族問題に関して、諸外国よりも寛容な姿勢で臨むようになった。

また、ジェノサイドは現政権を堅固なものにしている。政権の安定は即ち国家の安定に直結する。ルワンダのジェノサイドは国際社会から見捨てられたとされてきた。これは、安全保障理事会を始めとする国際機構の機能不全がもたらした悲劇に他ならず、強く反省すべきであるが、同時に、これはジェノサイドがルワンダ人（カガメを中心とするRPF）によって終結を見たことを意味する。この事実はカガメに国を統治するための並々ならぬ正当性を付与したと言えるだろう。さらに、カガメ政権が長期化するに従い、ルワンダ人は「自国のことは自国民の手で解決できる」という、王国時代以来失いかけていた自信を着実に取り戻しつつある。

以上の2点に、高い経済成長率等が相まって、ルワンダの平和は保たれているのだ。現職のポール＝カガメ大統領は、しばしば欧米諸国から独裁者であると非難されてきた。しかし、独裁は絶対悪だという認識は民主主義の作り出した幻想に過ぎないと言わざるを得ない。自分が話をしたルワンダ人は、例外なくカガメ大統領が好きであると言っていたが、それが嘘ではないことは伝わって来た。事実、数々の黒い噂があるにせよ、カガメ大統領が荒廃しきったルワンダを「アフリカの奇跡」と呼ばれるまで復興させることに尽力してきたことは確かである。

以上のようにジェノサイドにはルワンダの平和を支える側面がある。しかし、今回の渡航を通してジェノサイドの影響力が薄れつつあるのかもしれない、という印象を受けた。それは、現地の学生のジェノサイドに対する態度に見られる。彼らは非常に淡々とした口調で自らの国で起きた悲劇について語ってくれた。無論、意識して感情を抑えていた可能性はある。しかし、彼らの身内に加害者や被害者がいてもおかしくないことを考えると、彼らの態度に少々違和感を覚えずにはいられない。Kwibukaなどのジェノサイドを忘れないようにするための式典は定期的には開催されてはいるものの、歴史の風化は避けられない。ルワンダ人がジェノサイドを忘れたとき、ルワンダの平和は危ういものになってしまうだろう。

## 第 16 回本会議を振り返って

青山学院大学法学部 3年 眞鍋悠眸子

### 1. はじめに

私がルワンダに興味を持った理由は、ジェノサイドではなく、ルワンダ出身の歌手「コルネイユ」を、休学して滞在していた先で知ったことだった。彼の父親は PSD というツチ族の政党のリーダーであったため、フツ族からの標的になり、彼は自分の両親、3人の兄弟が殺されたところを見たという。その後、彼は大学に行くためにカナダ・モントリオールに移民した。この歌手のファンになった後にこの事実を知り、世界史の教科書で学んだ「ルワンダ大虐殺」という言葉が蘇ってきた。

また、私は大学で人権について学んでおり、特に女性の権利に興味があった。世界で一番高い女性の国会議員比率を誇るルワンダに、再び興味をひかれた。先進国と呼ばれながら女性の国会議員比率が 10%にも満たない日本に比べ、ルワンダは発展途上国と言われ、さらに「男は外、女は内」の伝統が強かった歴史があるにも関わらず、女性の社会進出を実現しているのである。

さらに、私はバイリンガルシティであるモントリオールに留学し、また幼いころから英語とフランス語を学んだ経験から、多言語教育にとっても興味があった。ルワンダは 2009 年に英語を、2016 年にはスワヒリ語を公用語と定めており、私は実際に現地に行って教育の方法や、どれだけ国民に新しい公用語が行き渡っているのかを知りたいと思った。

これらの理由から、私はルワンダに運命を感じ、渡航を決断したのである。

### 2. 滞在

一番初めに目を止めたのが、空港の出入り口に銃を持って立つ、ガードマンの姿である。ほぼ初めてあんなに大きな銃を間近に見たこともあるし、帽子の陰に隠れた鋭い眼差しが忘れられない。実際このようなガードマンは街のあらゆるところにいて、自分が悪さをしていないにもかかわらず、最後までその存在に慣れることはなかった。

次に、おそらく他のメンバーも書いているだろうことであるが、滞在先のゲストハウスから街に向かう途中の坂から見える夜景がとてもきれいだった。しかし、それは貧困層の人々が住む地域であることをメンバーに教えてもらって、自分がそれをただ「綺麗」と表現してしまったことに、複雑な思いになった。

また、そこら中で子供たちを見たし、触れ合う機会もあった。ルワンダには子供がとても多く、大きな布で子供のお尻から背中を巻いて、お母さんが自分の背中に括り付けて街を歩く姿が印象的だった。思い返せば、私たちが訪れたほとんどの場所で女性が働いていたように思う。メンバーに話を聞いた時には、ポール・カガメ大統領が女性の社会進出を促進していることで表面的な女性の差別は少ない。しかし、地方や国民の根柢の考え方は

昔の「男は外、女は内」というものからあまり変わっていないという。ルワンダの大虐殺の後、女性の地位が劇的に向上したように見えたが、国民の意識はそう簡単に変わらないらしい。きっと日本でも同じことが起こりうると思うが、日本は表面的な平等でさえ達成できていないので、まだまだルワンダに追いつくことはないと思った。

次に、言語についてである。メンバーの中には、英語よりもフランス語の方が得意な学生も多くいたが、同時に、小学生以来フランス語を全く話せなくなった人もいた。同じ年代の中の人でも言語差があるのは面白いと思った。地方に向かうバスの中で、隣に座る人と話をしてみると、キガリの人に比べて英語もフランス語も得意でない印象を受けた。少し年配の人だとフランス語も話せない人がいた。しかし、知っている言葉でコミュニケーションとろうとしたり、ルワンダ語を熱心に教えてくれたり、逆に日本語を教えてくれと言われたり、お互いに十分わかり合える言語がなくても、コミュニケーションをとるには困ることはなかった。

全体を通して、帰る3日前ほどに激しい腹痛に襲われることもあったが、とても充実した日々だった。

### 3. おわりに

私がルワンダに興味を持った理由をルワンダンメンバーに伝えると、あまり良い反応は得られなかった。「ホテルルワンダ」で有名なポール・ルセサバキナのように、大虐殺を機に国外へ出て戻らない者は、国内では英雄視されないらしい。主にカナダやフランスで活躍するコルネイユについても同様であり、落胆した。しかし、メンバーと行ったカラオケで、コルネイユの「Les Sommets De Nos Vies」を歌った人がいて、そこにいた多くの人と一緒に口ずさんだ。私は間違った動機でルワンダに来てしまったのかと思っていたが、実際にルワンダの人々とコルネイユの歌を歌うことができ満足だった。一人の歌手が、私を飛行機で24時間もかかるような国に連れてきてくれて、たくさんの素晴らしい人と出会わせ、学ばせてくれたと思うと、こんな単純な理由でも、ルワンダに対して熱い想いを持ち続けてよかったと思った。

ぜひ、ルワンダのジェノサイドだけでなく、色んな側面を知ってほしい、好きになってほしい。そしてあわよくばより多くの日本人にルワンダを訪れてもらいたい。個人的には、英語やフランス語の勉強を兼ねて、コルネイユの曲を聴くことをお勧めする。

## ルワンダで学んだ大切にしたいこと

共立女子大学国際学部 4年 佐藤美知瑠

初めてルワンダに渡航したこの2017年8月。このルワンダ渡航は私にとって忘れられない大きな経験になった。

高校生の頃に『ホテル・ルワンダ』という映画を鑑賞し、ルワンダに関心を持ち、いつかルワンダに行きたいという思いを持って、大学生活を送っていた。関心を持ってから6年の月日が経ったこの夏、私は初めてルワンダに渡航した。

まず、様々なご縁が巡り合って今回の渡航が実現したと感じている。私は、外部渡航メンバーとして選考に応募し、渡航のチャンスを頂くことができた。まず、日本ルワンダ学生会議という団体を知れたこと、渡航のチャンスを頂けたこと、個性あふれるメンバーと渡航前から時間を共にできたこと、顧問の小峯教授やOBOGの先輩方からより良い渡航のためにアドバイスを頂けたこと。様々なご縁に恵まれ、安全に渡航できたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

私は、この渡航でこれから大切にしたいたくさんのことを学ぶことができた。

1点目は、「人の痛みが分かる自分・社会でありたい」ということだ。ルワンダは1994年にジェノサイドがあった国である。渡航中には、ジェノサイドメモリアルを見学した。ジェノサイドメモリアルで今でも記憶に残っているシーンがある。それは、犠牲となった方の写真が飾られている部屋である。また、渡航中に「ジェノサイドがあったから、この国はまとまった」という声を何度か耳にした。その言葉は、起きてしまいもう変えられないことであるジェノサイドに意味づけをすることで受け入れようとしているのかもしれない。しかし、これから先、「人が傷ついた過去があるから、今の平和がある」というような社会を作り出しはいけないと感じた。人が傷ついてから、これはいけないことだと分かる社会ではなく、人の痛みが分かる社会を作りたい。そのために、まず私自身が相手の寄り添える人でありたいと強く感じた。

2点目は、「日本人が持っているルワンダのイメージと実際の姿の大きなギャップ」という点である。渡航前に、「ルワンダに行く」と友人に告げると、「大丈夫?」「危なくないの?」と声をかけられることが多かった。しかし、実際にルワンダに渡航してみると、危険と感じた場面は特になかった。ドローンを利用した医療品輸送サービスの施設を見学したことや都市の道が綺麗に舗装されていること、バスで無料Wi-Fiが使えることなど発展している姿を見ることができた。そのことを、帰国後友人に伝えると、「知らなかった」と驚いたようだった。物理的な距離があってもすぐに訪れることが難しいからこそ、行ったことがある私が情報を伝え、ルワンダに対するイメージをよりポジティブなものにしていきたいと思う。





3 点目は、「未来にワクワクする瞬間はとても楽しい」ということである。渡航期間中に行った学生会議の個人テーマを「夢」「志」にした。文化や育ってきた環境が違う年代の学生が何を思って、何を目指して生きているのかが知りたかった。メンバーが夢を大きな紙に書き、シェアする様子はとても楽しそうだった。ルワンダ＝ジェノサイドというイメージが大きいですが、その一方でこれからの未来という視点に目を向けることも大切だと感じた。

4 点目は、「伝える責任がある」ということ。様々なチャンスに恵まれ、今回の渡航の機会を頂いた。渡航の中でたくさん感じたことや考えたことがある。それらの学びを自分 1 人のものにとどめておくのはとてももったいない。素直に感じたことを発信し、現状を知った私だからこそ伝えていく責任がある。この渡航の経験を「行ってよかった」だけで、終わらせないよう今後も学び続け、この渡航で出会った方とのご縁を大切にしていきたい。

最後に、この渡航に関わったすべての方に御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 田舎者がルワンダに魅せられるまで

早稲田大学人間科学部 5年 阿部理

皆さんは、ルワンダに対してどんなイメージをお持ちでしょうか。ほとんどの日本人は、ルワンダに対して印象がないのではないのでしょうか。ご安心してください。ルワンダ側も日本に対しての印象は、テクノロジーが発展している国との印象しかない。少なくとも、街で会って私が話したルワンダ人はほとんど皆そう言っていた。つまり、お互いほとんど知らないのである。私は、中国に留学したのだから、中国人は良くも悪くも日本の事を知っているようであった。隣国であり、交流が何千年も続いた国であるから、当然かもしれない。しかしながら、ただ距離が離れているから、ルワンダについて知らないのは少々もったいない。ルワンダにはそう感じさせる魅力がある。

このグローバル社会の中で海外と関わらない生活なんてありえないと思う。例えば、テニスボール1つ作るのに23か国も関わっているのだ。錦織圭がウィンブルドンで打ってるテニスボールも、小学生がスポ少で打ってるテニスボールもである。もしかしたら、日常のどこかに、我々が知らないだけで、ルワンダが関わっているかもしれない。一方ルワンダ側には日本は大きく関わっている。車に関して言えば、街を走る車の90%はトヨタの車であった。中古車から高級車まで様々なトヨタ車が街を走っていた。アフリカと言うと赤土のイメージがあるが、ルワンダの首都キガリの市街地は道路が綺麗に整備され、トヨタが走っていた。そのようなハードインフラの発展には中国が大きく関わっているという。確かに、中国がアフリカに投資して影響力を強めているとの話は聞いていた。通りで、街行く人に你好と話しかけられる訳だ。中国に留学していたという学生にも会った。確かにそうなのだが、私はもっと中国人がいるのかと思っていた。何故だろうと思った。ルワンダにいる中国人は1500人。(因みに日本人は160人)アフリカの他国では10倍以上の中国人がいる。なぜであろう。それは、ルワンダの国民性にあるのだ。中国人がアフリカに進出した場合、中国人経営者は中国人を雇うという。

しかし、ルワンダではその必要がない。なぜなら、彼らは、勤勉で真面目に働く国民性だからだという。

この話は、ホームステイ先の「まことさん」から聞いたし、実際にホームステイをしてその勤勉性は強く感じた。彼は、前回の学生会議で日本に来たことがある。当団体とは長い付き合いだ。そんな彼は一見おちゃらけている。しかし、彼と話すと、その内に秘める情熱や想いがよくわかるのだ。

彼の家は、首都から離れたところにあるので、着いたのは、夜10時近く。申し訳なそうに入ると、彼の家族が大歓迎してくれた。両親、弟、親戚の子。プリモスという現地でよく飲まれるビールで乾杯した。彼によると、食事はいつも遅い時間のようだ。驚いた事に、料理は彼の高校生の弟が作ってくれた。本当によく手伝って両親を助けていた。自分が恥

ずかしくなった。敬虔なクリスチャンなので、食事の前は祈りを捧げる。食事はルワンダで食べた中で1番美味しかった。お店で食べるよりはるかに美味しかった。自家製のミルクは、普段ミルクが飲めない私でも美味しく感じた。

などなど、ここには書ききれない事が沢山あった。

1つエピソードを、紹介しよう。もっとも印象に残っている事だ。それは朝食を食べ終わった時だ。予定が急遽変更になり、彼の自宅で待機する事になった時のことだ。彼と何気なくした会話をもっとも印象的だった。それは、夢についてだ。彼は、ルワンダという自分が生まれ育った国をなんとかしよと、勉強していた。彼の面白い点は、皆が IT という中、彼は農業に着目している。現在ルワンダでは約7割が農業に従事しているそうだ。彼の両親も毎朝5時に起きて農業をして、その後自分の仕事へ向かっていた。夜12時すぎに寝て朝は5時起きなのだ。よく両親を手伝う息子たちを上述したが彼らは勤勉に働く両親を見ているのであった。まことさんもそんな両親の後ろ姿を見て育ったのだ。だから、彼は農業を何とかしたかったのであろう。7割の人が農業に関わっているが GDP にしたら3割ほどだという。彼は、韓国をモデルにあげ、50年前の韓国の農業は現在のルワンダに似ていると。だから、彼は韓国を実際に訪れ、農業に関する勉強を本格的に始め、韓国への留学チャンスを伺っている。文章ではうまく伝わらないが、あれだけおちゃらけていた彼が、実は熱い思いを持っていたのだ。それも、胡散臭くない現実的なものだ。私は、その日朝から感動した。こんな熱い思いを持った若者がいる、ルワンダはすごいなど、刺激になった。

彼のような学生に加え、ドローンで血を運ぶ仕組みや3D プリンターなどを使いこなしている様子を見てルワンダに満ち溢れる可能性を感じた。「ディープフロッグ」という言葉があるが、ルワンダはまさにそうであった。加えて、勤勉な国民性、夢をもつ若者がいる。おそらく20年以内にルワンダはとんでもない国になるであろう。これからが楽しみな国である。

私は、山形の田舎で育って、海外とは縁遠いものと思っていたし、ましてやアフリカと関わるなんて思っても見なかった。そんな私をも魅了する何かがルワンダにはあるのだ。私は、来春から、世界中で働く機会のある業界で働く。中でもアフリカで働く機会が多い。ひょっとすると、ルワンダで働けるかもしれない。その時、今回の渡航で出会った仲間達、特にまことさんと働けたらより一層幸せである。

## 「アフリカの軌跡」ルワンダ

早稲田大学政治経済学部 2年 原一生

数百万人が亡くなるという大虐殺を経験したにも関わらず、現在では国民全体がその過ちを反省し同じ目的に向かって努力しているという世界的に見ても稀な発展プロセスを歩んでいる国であることを、ルワンダについて述べる時は強調したい。私が渡航前にアフリカ諸国に対して持っていたイメージは紛争、飢餓、発展途上といったネガティブなイメージばかりであった。しかしルワンダでの様々な経験や見聞が私のマインドセットを変えてくれたのだ。それはルワンダ政府による IT 教育への投資、kLab、FabLab、Zipline などの IT 関連企業の活動やルワンダンによるプレゼンテーションを通じて得られたものがきっかけであった。現在ルワンダ政府は、1994 年のジェノサイド期以降の人道的支援を受け、国を運営する段階から、先進国も目指している持続可能な社会の実現を図りながら成長していく段階へと移行するために、現在の農業中心の産業形態から知識を利用したサービス産業の形成を目指すといった指針を掲げる Vision2020 というガイドラインを提唱している。私はそのガイドラインにおける One Laptop Per Child(OLPC)という政策にルワンダという国の先進性を特に感じる事ができた。この政策は子ども一人に一台のパソコンを提供するというものだが、これによってプログラミングやペインティングなどの IT に関する実践的なスキルの基礎を身につけることができるのである。それこそ最近になって日本では 2020 年に小学生の段階でプログラミングの履修を義務付けることが文部科学省によって提唱されたのだが、すでにコンピューターサイエンスについての教育に力を入れているアメリカを代表する先進国の中では遅れをとっている。しかしルワンダはこの IT 教育の重要性に気づき、それを導入し、実際にルワンダから多くの IT のスタートアップが誕生している。さらに国としてもインターネットの普及率も国土の 90%と先進国顔負けの数字をもっている。数年前にはジェノサイドを経験し、立地の観点から資源にも恵まれないという状況に置かれながらもこれだけ発展した国は世界では類を見ないであろう。またルワンダンによるプレゼンテーションもルワンダだけでなくアフリカに対するイメージを変えるものであった。月の最終土曜日に行われる「ウムガンダ」がその一例である。この日は商業活動が一切ストップし、ボランティアで近隣地域の清掃やジェノサイドによる被害の復興事業に家族の内の一人が代表として参加し、その後には、その地域だけでなく国単位の問題について自治体で話しあうという機会が設けられていて、共同体の結びつきを強めることができる要因の内の 1 つだと理解している。言い換えると、この政策はルワンダが逆境に打ち勝ち、成長し続ける要因であり、最終的に地域住民と協力することを通して他者との信頼を深めルワンダ人としての連帯意識が芽生えることに繋がる政策だと考えている。日本では孤独死や選挙率の低下など、地域住民の社会に対する関心の薄さが原因で生じている社会問題が多く存在する。なのでこういったルワンダのアイディアは日本に住

む 私にとってはとても興味深かったし、日本政府も取り入れてほしいと思った。また、2015年には国会議員全体に占める女性議員の割合が世界一であるという統計データも存在するほどルワンダでは女性の社会進出が進んだ国であるという事実を知り驚愕した。そして私がルワンダ人と交流して一番驚いたことは日本人に似て勤勉で真面目な気質をもった人が多いということである。多くのルワンダ人は常に周りに気を配っていて、いわゆる「空気を読む」という文化があるのではないかと思った。日本から遥か離れたアフリカの地で、まさかこういった経験ができるのは思ってなかったが、道端で歩きながら話している時やホームステイをした時にそういった日本人に似ている気質を多々垣間見ることができたのである。また多くのルワンダ人から「国の発展に貢献するために勉学に励む」という姿勢、使命感のようなものを感じ、こういった若者の国に対する強い帰属意識も国の躍進に関係しているのではないかと思った。このように私は遠いアフリカの地ルワンダで日本では触れることができない数多くのアイディアに触れ、アフリカやルワンダに対するイメージを変えてくれたのである。私は渡航を通じて、先進国に住む人々は優れたモノや技術、考え方をもっていて、そういった発展途上国は支援の対象でしかないといった偏った考えをもった人が多いが、そういった考えを捨てること、また本当のその国の姿を詳細に見ることがいかに重要であるかということを学ぶことができた。20歳でルワンダという素晴らしい国に住む人々や、文化、価値観に触れることができて心から良かったと思っている。将来的には、ルワンダで出会った友人とはこれからも良好な関係を築いていきたいし、ルワンダに何らかの形で貢献していきたい。

# ルワンダ渡航を経て

国際基督教大学教養学部 4 年 藤井恵

## 始めに

ルワンダはもう一度行きたい場所であり、そんな思いをさせてくれる現地での人との出会いがあった。2017 年 5 月に日本ルワンダ学生会議（以下、JRYC）に所属するまで、まさか自分の残り少ない学生生活の間に憧れの地、ルワンダに行く機会が巡ってくると思ってもいなかった。そんな幸運なチケットを手に入れて訪れたルワンダでの 12 日間は驚きの連続で、当たり前なことではあるが、何事も百聞は一見に如かずだと痛感した。インターネットや書籍からでは、すべての情報は分からない。ましてやアフリカに関する日本語での情報は限られている。ルワンダについて調べても、検索結果の大半はジェノサイドの一件が占めている。しかし、実際に自分の足で現地に赴き、五感のすべてをフル稼働して過ごした日々は学ぶことが沢山あり、渡航出来たこのチャンスに本当に感謝する。

渡航後の今は、「ルワンダの今の姿を、より多くの日本人に知ってもらいたい」と考えている。そして少しずつではあるが、日本人の持つルワンダのイメージを変えていきたい。これは後に触れるように、ルワンダに渡航したいと思った理由の 1 つでもある。もちろん、どんな国でも良い面も悪い面もどちらもある。それでも、偽りもせずありのままの姿を伝えることが渡航者の責任なのではないかと考える。本感想には、渡航理由と、現地で学び考えたことについて述べたいと思う。

## 渡航理由

まず最初に、私がルワンダに最初に興味を持ったきっかけから書きたいと思う。話は、2011 年の高校 2 年生の時に遡る。当時、アメリカの高校に 1 年間交換留学をしており、現地で国際関係学の授業を履修していた。その授業では、アメリカの同時多発テロやイスラエル・パレスチナ問題、広島・長崎の原爆等、（本当に失礼な言い方ではあることは承知しているが）すでに聞いたり学んだりしたことあるような国際的な問題について、ディスカッション等を通じて学んでいた。その中で、その授業の単元の 1 つとして、1994 年に起きたルワンダのジェノサイドが取り上げられたのがルワンダを知る最初のきっかけだった。映画「Sometimes in April」（邦題：ルワンダ 流血の 4 月）を鑑賞し、この映画は後に私がルワンダについて興味を持ち始めるのに、忘れもしない衝撃と絶大な影響を与えた。映画を鑑賞し終えた直後の私は、想像を超えた過去の出来事に、頭の中の回路が必死に今見たものを理解しようとフル回転していた。それは何故かという、このジェノサイドが勃発したのは、1994 年 4 月から 7 月の約 100 日間だが、私自身が生まれたのが 1994 年 5 月で、まさにルワンダではジェノサイドの最中であつた。それを知った時に、もし日本ではなく、世界の他のところで生まれていたら殺されていたかもしれないという恐怖よりも、自分が生まれた当時に世界で起きていた出来事を 17 歳になるまで一切知らなかった無知さに驚愕

し衝撃を受けた。

そしてその授業で、現在のルワンダはジェノサイドの負の歴史を乗り越えて、目まぐるしい経済成長をしていると聞いて、なんとなく想像が出来ず疑問が残っていた。留学後もこのことは忘れられず、いつかルワンダを訪れて、自分の目で現地の様子を見ていきたいと決意した。

ルワンダに再び興味を持つようになったのは、ある家族との出会いがあった。2016年の4月、アメリカに大学留学していた時に、海外からの難民を一時的に受け入れる施設を訪問し、そこでルワンダから政治亡命をしてきた家族に出会った。その際に、子供たちはとても明るい笑顔をしたのにも関わらず、父親は厳しい表情を崩さず口数が少なかった。個人の事情があるため詳しい話は聞けなかったが、アメリカに自由を求めに来たと話している姿に、ルワンダではどのような生活を送っていたのだろうと気になった。

その後、日本に帰国してから、留学先での体験を両親や周りの友人に話していると、日本人のもつルワンダのイメージと実情の間にズレがあるのではないかと感じた。私は、ジェノサイドの負の歴史あったものの、現在は「アフリカの奇跡」と呼ばれるほど発展をしているという話から、詳しくは分からないものの、それとなく国に対してポジティブな印象を抱いていた。しかし、周囲の反応は「でも、ルワンダってアフリカでしょ?」「ジェノサイドあったところでしょ?」「槍持って飛んでそう」等、一つの国ではなくアフリカとして捉え、まだ発展途上国で汚そうだし危険という意見を持つ人が多かった。この認識のズレは実際に現地に行ってみないと分からないだろうと考えていた矢先の2017年5月、本当に偶然 JRJC がこの夏のルワンダ渡航のメンバーを募集している記事を見つけた。そもそも日本とルワンダに国交があることに驚いたと同時に、その記事を見た瞬間、これは絶対に参加したいと言葉に表せない興奮を感じながら、応募書類をすぐさまダウンロードした。

このように、ひょんなことからルワンダに渡航することが一気に現実となった。その後、団体の事前の勉強合宿などを通じて、今までルワンダについて少し知った気があったも、実はジェノサイドへの固定観念が大きく占めていて、実はまだ何も知らないことと気づいた。まだジェノサイドのイメージ以外あまりない真っ白いキャンパスだからこそ、五感をフル活動させて現地で見たいもの聞いたもの気付いたことをすべて吸収して帰国しようと思決意した。そうやって私の12日間の渡航は始まった。

#### ルワンダ渡航を経て学び考えたこと

前半の渡航理由が予想以上に長くなったことと、現地での濃密な12日間を簡潔に文章にまとめられそうにもないので、渡航を通じて学んだことをざっと箇条書きであげていく。これを読んで、1つでも目に留まるものがあったら、是非ルワンダに足を運んでご自身の目で現地の様子を見て頂きたい。(もちろんアフリカ渡航は簡単なことではないので、国内だったら、JRJCへの参加も大歓迎です！笑)

- ・「千の丘の国」本当に小高い丘が多く、どの地点からでも街を一望できる。夜景が圧巻。
- ・道路は舗装され発展している
- ・道端にゴミが落ちていない。清掃する文化があること
- ・ツチ族とフツ族の身体的差は他国によって作られた概念で、本来は階級の差を表すものだった
- ・ウムガンダなど、コミュニティーを大切にする文化
- ・国の政策で現在スポーツに力を入れていること
- ・数メートルおきに銃を持った兵士が立っている。どのビルにもセキュリティーチェックが導入されている
- ・マクドナルドなどの企業が未進出
- ・日本の企業が介入できそうなビジネスチャンスが溢れている（特にインフラ）
- ・ルワンダ人と日本人は気質が似ている
- ・仕事にまじめ

本当は書ききれないほど、多くの学びがあったが、それは文章で書くよりも是非お近くの渡航経験者から直接話を聞いて頂きたい。日本から遠く離れたルワンダの土地に、いつでも話せる友人が出来たことはこの渡航の最大の収穫であった。渡航中は、政治的な真面目な話から恋愛の話まで、腹を割って話し合える友達に巡り合えた。次会えるのはいつになるか分からないが、これは good-bye ではなくて、see you again である。

### 追記

渡航を終えて、私がルワンダに興味を持つきっかけを作ってくれた高校のアメリカ留学時の授業の先生に連絡を取ったところ、自分の授業が教室だけの学びで終わらずに、ルワンダ渡航というアクションに繋がっていることを喜ばれていた。そして、私が渡航を通じて見て学んできたことを、是非今年の授業で共有したいと提案していただいた。このように、私個人が出来ることは小さいかもしれないが、ルワンダのことをより多くの人に伝えたい。これが私の現在の人生の目標の1つである。そしてまた、遠くないうちにルワンダに再訪したい。MURAKOZE!



## ルワンダで学んだこと

北海道大学理学部 2年 上川侖

今回唯一の北海道からの参加でした。ミーティングはしていましたが、メンバーに会うのは空港ですが、初めてでした。自然と打ち解けられました。初めてのアフリカであったので、多少恐怖心がありました。しかし、実際にルワンダへ着くとその恐怖心はなくなりました。ルワンダ人学生は、皆優しく、すぐ打ち解けられました。ルワンダでは沢山の事を学びました。

ここでいくつか紹介します。まず、ICTに関して勉強になりました。ルワンダは想像以上に進んでいて、とてもアフリカとは思えませんでした。自分の先入観で判断していただけでした。

ルワンダで驚いた事は、鶏肉が牛肉より高いということです。これも、現地に行かなければ分からないことでした。さらに、ルワンダの街の清潔さにも驚きました。アフリカの街はあまり綺麗ではないという先入観がありましたが、実際に行ったら全く違っていたのです。路上にゴミが落ちていたことはほとんどなかっただけでなく、掃除をしている人が目につくくらいでした。私は自分の思考の稚拙さを恥じました。ルワンダをアフリカの国というラベルによってのみ判断し、国民性などの重要なファクターを見落としていたのです。このような様々なエピソードから、多角的なものの見方の重要性を痛感しました。同時に、自身の未熟さを思い知らされた渡航でもありました。

未熟さといえば、ルワンダの英語教育にも驚きました。都市と地方の差はありますが、特に私達が関わったルワンダ人の学生の英語のレベルはすごく高く、ディスカッションについて行くのは簡単ではありませんでした。自分の未熟さを痛感しました。私は英語を話す際自信がなくとても小さい声になります。彼らの堂々とした姿に恥ずかしさと悔しさを感じました。

その一方で、地方に行くバスの中では、英語もフランス語も話せない人もいました。それでも身振り手振りで意思疎通ができました。日本に興味を持つ人もいたりして、嬉しかったです。

ホームステイ先でも、ルワンダ人メンバーの両親が英語で話しかけてくるのですごいと思いました。もちろん、家族のメンバーも英語で話ができます。一番若い、でも小学校くらいの男の子が英語を話せなかったのが不思議でした。学校ではまだ習っていないのかと想像します。

街の中は英語の看板で溢れていました。なぜ、2009年からこのような速さで英語が普及したのかメンバーに聞くと、それはルワンダ人が国を良くしたいという気持ちが強いのからでした。英語が普及すれば海外企業も入ってきやすくなったり、他国と貿易しや

すくなるということでしょうか。日本には英語を学ぶこれほどの気迫と、ハングリー精神はないと思いました。

このように様々なことを、学び、感じました。

このような経験ができるのもご支援してくださった方々あってこそです。感謝しております。また、メンバーにも数多くご迷惑をかけたので反省しています。

まだまだ若いので、今後は、ルワンダに限らず、好奇心を持って色々なところに行きたいです。またルワンダで学んだ事を北海道へ還元したいです。



## 16<sup>th</sup> conference reflection

Lucky BARAHEBUZA

My name is Lucky BARAHEBUZA; I am a fourth year student in University of Rwanda College of Science and technology, school of sciences, department of biology, option of botany and conservation.

It was exciting to attend during the 16<sup>th</sup> conference started from 5<sup>th</sup> August to 15<sup>th</sup> August; I learned many things on my own even though I could not attend the whole conference as I was busy doing my internship thereby, few days I attended were very productive and I really appreciated.

For the first day, we welcomed our Japanese colleagues from the airport (Kigali international airport) and I was excited to meet them, with JRJC Rwanda side warm welcome, everybody was happy and that day made me think about how wonderful the conference is going to be. I was surprised how Japanese thought about Rwanda and how they were surprised about the progress Rwanda made after 1994 genocide against the Tutsi.

The following day, we visited Gisozi genocide memorial in the morning and everybody was curious to know about the shocking story of Rwanda, I was surprised how they knew about Tutsi genocide in Rwanda but only from internet and other sources but that time they were on the field where they were going to get the package of knowledge about that; I was giving additional information to Japanese as sometime it is difficult to get the meaning directly when it's not your mother language and as they were eager to learn I could not stop answering questions and I liked that so much because Japanese wanted to know about my country's story.

After Gisozi genocide memorial visit, we made presentations about different topics in the afternoon where we learned about Car free day and car free zone and its importance to Rwandans, we learned also about Japanese lifestyle, as well as umuganura day in Rwanda and It was very productive to us as we discovered about each other's culture and exchanged about our lifestyle.



**Tamazi (Japanese member)**



**Leandre preparing the**



**Daniel (Rwandan member)**



**During presentation by**

During the second day, we went outside of Kigali and we went to visit King's palace at Nyanza in southern province of Rwanda and we experienced the outside of the capital city, everybody was happy about the country and how it is safe everywhere, and we learned about traditional Rwanda, traditional buildings and the role played by different kings during expansion of Rwanda;



**Taking picture with the palace**



**Girls learning how to use traditional mill**



**Posing for selfie**

afterward, we pursued our visit to PIASS (Protestant institute of Arts and Social Sciences) in Huye district where we got inspired by professor Kazuyuki sasaki on Peace building and conflict management as it is part of his work in Rwanda;

Now, I have two days remaining before I leave the conference, but the most important day was the

last one as I only attended during presentations for the first day, we learned a lot where we had stunning presentations about different topics including mine (tourism in Rwanda), free hug project and many more but I could never forget about birthday surprise to **Yumeko Manabe** and this strengthened the bond between both sides indeed.



**Celebrating yumeko's BD**

For my last day in the conference, we visited drone delivering blood in Muhanga district where we learned about how Rwanda is using technology in health sector to save human life and after this we visited campaign against genocide museum where we learned many things about RPF battle that stopped genocide and saved many people and the strategies used during this project as well as the main objective of rescuing people's lives.

To cut a long story short, the conference was very productive to me and my friends as I learned many things, although I was not present for the whole conference and I suggest that we could make the time longer so that we can explore more for both sides;



**Shopping**

## 第 16 回本会議リフレクション

Lucky BARAHEBUZA

訳：後藤聡子

私の名前は Lucky BARAHEBUZA で、私はルワンダ国立大学理工学部の科学学科で生物を専門とし、植物と保存を専攻している。

私は8月5日から15日まで行われた第16回本会議に参加するのがとても楽しみだった。その時期インターンがあって全ての日程は参加できませんでしたが、多くのことを学ぶことができ、参加できた日々はすごく充実していて感謝している。

1日目、私たちは日本側の仲間を空港（キガリ国際空港）にお迎えに行き、彼らに会えるのを楽しみにしていた。私たちルワンダ側は温かく迎え入れ、誰もが楽しんでいて、その日私はこの会議がどれほど楽しい物になるのかと楽しみになった。私は日本人がルワンダについてどのように考えていて、1994年のツチ族に対する虐殺の後どれほど進歩したかについて驚いていることにびっくりした。

次の日は、朝方にジェノサイドメモリアルを訪問し、全員がルワンダの衝撃的な物語に興味を示していた。日本人はインターネットや他の情報源からしかジェノサイドのことを知らないことには驚いたが、今回は実際に起こったその地で、多くの知見を得られた。母国語で書かれていないことは、日本人には時に完全に意味を理解するのは難しいため、私が追加の情報をいくつか教えてあげた。というのも、彼らはすごく学びたい姿勢を持っているため私はやめることなく質問に答え、また日本人が私の国の物語を知りたがっていることがすごく嬉しかった。

ジェノサイドメモリアル訪問後、午後には様々なテーマに関してプレゼンテーションを行った。そこではルワンダ人にとってカーフリーデーとカーフリーゾーンがどれほど大切なものか、また日本の生活様式、ルワンダにおける **umuganura day** について学んだ。お互いの文化や生活様式を学び、とてもためになった。

2日目にはキガリを出て、ルワンダの南の地方にある Nyanza の王宮を訪問した。首都の外を味わい、全員が楽しんでいて、またどこも安全であることに驚いていた。また、ルワンダの伝統、伝統的建築物やルワンダの拡大の過程で王様たちが果たした役割を学んだ。その後、Huye 地方にある PIASS へと行き、佐々木和之教授の、彼のルワンダでの仕事の一つでもある平和構築と紛争管理についてのお話に感銘を受けた。

もう私が参加できる日程は残すところわずか2日だが、一番印象に残ったのは最後の日であった。2日のうち1日目はプレゼンテーションにしか参加できなかった。ですが、そこでは私のプレゼンテーション（ルワンダにおける観光）やフリーハグプロジェクトを含む様々なテーマに関する素晴らしいプレゼンテーションがあった。しかし私が忘れられないのは真鍋さんへのバースデーサプライズである。これが大いに両国の間の関係性を強化したと思う。

私にとっての本会議の最終日には、**Muhanga** 地方にある血液運搬ドローン施設を訪れ、ルワンダが人々を救うために健康部門においてどのように技術を使っているのかを学んだ。その後、反ジェノサイドキャンペーン博物館を訪問し、ジェノサイドを停止させ多くの人を救った **RPF** 反抗や、その間に使われた戦略や人々を救うという主な目的を確認することができた。

長い物語を短く要約すれば、全日程参加はできなかったものの、学生会議は私や私の仲間にとって多くのことを学べた有意義なものであった。もっと両国について色々学ぶためにも、是非期間を長くできればと思う。

# A REVIEW OF THE 16<sup>TH</sup> CONFERENCE

By: Mugisha Alain Philemon

- **Introduce yourself.**

My name is Mugisha Alain Philemon. I am 23 years old and I am Rwandan. I am pursuing a bachelor's degree in Applied Statistics at University of Rwanda, Huye Campus.

It has been one year since I joined JRYC and I have settled well.

- **How was your experience during the conference?**

This year's conference was the first ever conference I attended as a JRYC member. It was a bit strange to me! When we were making final preparations we used to talk about how we wished the conference to be. Of course everyone else was referring to the past conference(s) and saying what we have to improve, what we must ensure for the conference to be successful. Me I had not any slightest idea. I only listened to what others were saying.

I had an honor to participate in many projects of the conference, I led many, and I assisted many. Every day that passed left a memory to me, either an experience or a lesson.

I remember every time we visited a project site, how we were interested in knowing more about it. We were much willing to learn. I should say it was like a study tour. Remember how excited we were when we visited JICA-Rwanda office. Even people there told us it had been a while since they had seen such a group of young people willing to learn.

Also I recall moments when we were on buses back or to places, how we used to travel singing famous artists' songs. One time (in Musanze City, after visiting karisoke research center) we were sitting in a restaurant and we started singing Japanese songs (I don't remember the names, but I guess they are of UB40). While singing I was looking at everyone around. What a happy moment was that! I think this showed how much we enjoyed what we were doing!

After all, I recall how we lived as a group! This is for me the greatest achievement of the conference. Since day 1 to the last day, it was like we had been living together for 10 years or more. Everyone was able to talk to another freely. And when there was any little problem we sat down, discussed the issue and looked for a solution together. There are so many memories, These are the ones that came first on my mind.





1 My Favorite Picture!

● *What do you think of JRYC?*

I believe JRYC is doing well. I believe the way we are looking to create a bond between Rwandan and Japanese students is a better one, even though there is a certain level we have not yet achieved. So we need to keep working hard, to keep pushing hard. WE NEED TO KEEP BELIEVING IN OURSELVES!

Sometimes when a conference concludes most of us think it's over. We stop acting, we sleep; but we resume relations when a next conference approaches.

If I could I would suggest that both sides keep communicating each other. Whenever you hold a meeting, just let us know how it went.

The same applies to Rwanda side. If we organize an event, we should let you know. We should seek advice from you as much as we do between ourselves (Rwanda side) because no matter in which country we are, we are one JRYC. Thank you!

## 第 16 回本会議リフレクション

Mugisha Alain Philemon

訳：後藤聡子

自己紹介：

私の名前は Mugisha Alain Philemon で、23 歳のルワンダ人である。ルワンダ大学 Huye キャンパスで、統計学を学んでいる。

私が JRYC に加入してから一年が経ちますが、大変なじんている。

学生会議の感想：

今回の会議は私が JRYC メンバーとして参加した初めての会議であった。少し不思議な感じがした。最後の調整を行っていたとき、会議がこのようになると良いね、というようなことを話していた。もちろん皆過去の会議を振り返って、どこを改善したいとか、会議の成功には何が必要かを考えていた。しかし私は全く分からなかったので、皆が言っていることを聞いていた。

私は会議の多くのプロジェクトに参加できることをすごく嬉しく思い、多くのものを先導し、多くを補助した。毎日が、経験としても教訓としても、とても良い思い出となった。

プロジェクトの訪問地を訪ねる度に、私たちがもっともっとそれについて知りたくなっていたのを覚えている。より学びたくなっていたのだ。まるでスタディーツアーのようであった。JICA ルワンダ支部を訪れたときの興奮は覚えている。そこの方々がこんなにも学びたいと思っている人たちを見たのは久しぶりだとおっしゃったほどであった。

また、訪問地からの行き帰りに、バスの中で有名な歌手の歌を歌ったのは印象的だった。1回(カリソケ研究所からの帰りの Musanze シティ内で)、レストランの中で日本の曲(名前は覚えてはいないが、多分 UB40 のもの)を歌った。歌いながら私は周りを見ていたが、なんて楽しい時間だったのか！これは私たちがいかにこの会議を楽しんでいるのかを表わしていると思った。

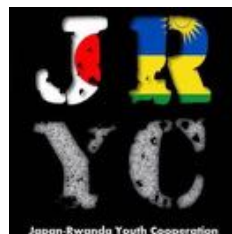
結局、私は一つのグループとして過ごしたことを思いだす。私にとってこれが学生会議の最も大きな収穫であった。1日目から最終日まで、まるで10年以上一緒にいたような感覚であった。誰もがお互いに気軽に話しかけられた。もし何かトラブルがあったら落ち着いてそれについて議論し、共に解決策を探した。多くの思い出がありますが、これらが一番始めに頭に出てきたものであった。

JRYC はすごく順調だと思う。まだ達成できていないレベルもあるが、ルワンダと日本の学生の間での件形成の構築の仕方はすごく良いと信じている。よって、もっと努力して行かなければいけない。自分たちを信じていかなければならない！

会議が終わると全てが終了したと我々の多くは時に考えてしまう。行動しなくなり、眠ってしまう。しかし、また次の会議が近づいたら関係を復活させる。

もし可能なら、双方が連絡を取り合い続けると良いと思う。ミーティングを開催したら、どうだったか教えて下さい。

同様のことがルワンダ側にも言える。イベントを企画したら、お知らせする。ルワンダ側で行っているのと同じくらい両国間でもアドバイスすると良いと思う。というのも、どちら側においても、我々は皆 JRYC のメンバーだからである。ありがとうございました！



## 16<sup>th</sup> JRYC CONFERENCE REVIEW

Daniel IGIRIMBABAZI

This year, Japan Rwanda Youth Cooperation held the 16th Conference in Rwanda, as part of many activities undertaken annually by the Cooperation. The conference was held from 5<sup>th</sup> August to 15th August 2017.

This conference convened University students from Rwanda and Japan to enhance mutual understanding between two countries through culture exchange and study tours.

During the Conference, we did several activities including visiting different places in Rwanda as well as daily presentations from each side (Rwanda and Japan) to share ideas on our past, present, and our vision towards our future.

Starting from the arrival day of JRYC Japan side, we were eagerly waiting for them at the airport and I was looking forward to see them because I didn't know any of them by then. By the time they showed up we gave them a warm welcome and I noticed all of us were happy and full of enthusiasm, we introduced ourselves to them and so did they as we took a group photo, and it was fun



I personally didn't manage to be with the group at every activity on the conference schedule, but I managed to be with them at most of the activities such as the School visit project where I was a leader and we visited UMUCO MWIZA SCHOOL, a local primary school where we were amazed by the way the school director and staff welcomed us and showed us around explaining how they carry out the daily activities of the school, the

director could speak fluently Japanese language so it was fun for Japanese students to ask questions and interact with her.

I also managed to be with the group when we visited blood drone delivery project ZIPLINE, we were warmly welcomed by one of the project staff member who showed us around as he demonstrated clearly how they operate drones to transport blood to emergencies and answered to our questions to make us fully understand all about that very crucial project, we really liked it. In the afternoon of the same day, we paid a visit to the Rwandan parliament headquarters where we visited specifically the national museum located there which holds the history of how Rwandan current ruling party RPF liberated the country from the bad politicians who were ruling the country in chaos and discrimination, the party won the battle and started rebuilding the country with Reconciliation, Peace and Development which we currently enjoy, that day was remarkably well spent.

Another important event I participated in was the JRYC COMMUNITY EXCHANGE, an event where we invited some of the guests of honor such as the ambassador of Japan in Rwanda TAKAYUKI MIYASHITA, Dr. Charles MULIGANDE former ambassador of Rwanda in Japan, JICA Rwanda representatives, and friends of JRYC to reflect on culture, education and other aspects which matter to foster the relationship between Rwanda and Japan through JRYC. We performed different traditional dances of both countries as the Japanese took time to learn and perform Rwandan traditional dances and we Rwandan members learnt and performed Japanese traditional dances which were fun. There was a panel discussion where Dr. MULIGANDE shared with us some motivational skills to help us as youth to be future good leaders and in event concluding remarks MIYASHITA congratulated JRYC for successfully planning the event and promised us to offer the necessary help for future activities.

There used to be the presentations in the afternoons by either Rwandan or Japanese members on different chosen topics which were very interesting. I was pleased to share with the group my presentation about KIGALI CAR FREE DAY, and I liked all of the other presentations that were shared. Among the presentations from the Japanese side I learnt that Japanese like taking public baths, being kind, hardworking, not very social, etc. It was really unforgettable moment to hear many stories about Japan, eat together, have fun, most of all I made friends such as KAZUKI who came with me for homestay and my family liked him very much, everybody was so cool and easy going with a friendly attitude which made me quickly adapt to talking to them and they taught me some of the Japanese words such as ARIGATO. I really appreciated all of the JRYC Japan side members; Kazu, Rey, Tamazi, Yumeko, Lizzy, Megumi, Michiru, and Abe, you guys made the conference worthy.



On departure day, we still wanted them to stay with us but they had to go back to Japan. We exchanged the gifts and said goodbye as we waited outside the airport until they took their flight. Hopefully we will see you again guys.

Finally, I would like to emphasize that we should put in our efforts to keep up this JRYC initiative and keep it up.

Thanks

## 第 16 回本会議リフレクション

Daniel IGIRIMBABAZI

訳：後藤聡子

今年、日本ルワンダ学生会議は毎年行われている活動の一環として、ルワンダで第 16 回本会議を行った。この会議は 8 月 5 日から 15 日まで開催された。

この会議は、文化交流やスタディーツアーを通じて両国間の相互理解を促進するためにルワンダと日本大学生を中心に行われた。

会議の間、私たちはルワンダにおける様々な場所を訪れたり、過去、現在、そして将来のビジョンについて考える両サイドからのプレゼンテーションなど、様々な活動をした。

日本側の到着日から始まり、私たちは空港でとても楽しみに待っていて、まだ一人もその時は知らなかった所以他们に会えるのをすごく楽しみにしていた。到着したときには温かく迎え入れ、全員が嬉しくて、熱気にあふれていた。お互いに自己紹介し、グループ写真を撮り、楽しかった。

個人としては、全ての活動には参加できなかったが、自分がリーダーを務めた学校訪問プロジェクトなど、ほとんどのものには参加できた。私たちは地元の小学校の **UMUCO MWIZA** 学校を訪問し、校長先生や職員の方々が迎え入れて下さり、毎日の活動をどのように行っているかを説明していただきながら学校の中を案内して下さいました。校長先生が日本語を流暢に話せたので、日本人の学生はお話ししたり質問するのが楽しいようだった。

また、血液運搬ドローン **ZIPLINE** もともに訪問した。職員の方にご案内いただき、緊急の時にどのように血液をドローンで運ぶかを分かりやすく実践していただき、この大変重要なプロジェクトを完全に理解するために我々の質問にも答えて下さり良かった。同じ日

の午後、ルワンダの議会を訪問し、そこにある国立博物館に行った。そこには、現在ルワンダを統一している RPF が、国を混沌と差別によって支配していた悪い政治家からルワンダをどのように解放したかという歴史が書かれている。RPF は戦いに勝利し、国を和解、平和そして発展と共に再構築を始めた。そして私たちはいまそれを楽しんでいて、この日は大変充実していた。

私が参加したもう一つ大切なイベントは、駐ルワンダ日本大使の宮下孝之様、元ルワンダ大使の Dr. Charles MULIGAND、JICA ルワンダ代表、JRYC の仲間たちなどのゲストをお迎えして行った文化交流だった。ここでは JRYC を通じてルワンダと日本の間の関係を築いていくにあたって関係してくる文化、教育、そして他の様々なテーマについて振り返った。私たちは両国の伝統的なダンスを披露し、お互いのダンスを学びパフォーマンスして、すごく楽しかった。Dr. MULIGANDE が私たちに将来の有望なリーダーになるためのモチベーションが上がるスキルを教えていただいた。最後には宮下様に JRYC がこのイベントを成功に導いたことを祝っていただき、将来の活動にもできるだけお力添えいただけることを約束していただいた。

午後には、大変興味深いテーマについてのルワンダ側と日本側のプレゼンテーションがあった。私のカーフリーダーのプレゼンテーションをグループで共有できたのは良かったし、他のプレゼンテーションも面白かった。日本側のプレゼンテーションからは、日本人は大浴場が好きで、優しくしたり、一生懸命頑張ったり、あまり社会的でないことが好きだと学んだ。日本についての様々な話を聞いたり、一緒にご飯食べたり、楽しんだりしたのは忘れられない瞬間である。何よりも、ホームステイで我が家に来た一生のような友達ができただけで大きかった。私の家族は彼のことが大好きで、まただれもが気さくで、友達のような感覚だったので、すぐに彼らと話すことができ、また「ありがとう」などの日本語も教えてくれた。私は JRYC の日本メンバーの全員に、この会議を充実したものにしてくれたことに感謝する。かず、れい、たまじ、ゆめこ、りじー、めぐみ、みちる、そして阿部さん、ありがとうございました。

## 後援・助成団体様・ご協力いただいた方々

### SUPPORTERS

#### 後援（順不同）

- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）様
- ルワンダ国立大学（National University of Rwanda）様
- アフリカ平和再建委員会（ARC）様
- 在日本ルワンダ共和国大使館様

#### 助成金団体様（順不同）

- 双日国際交流財源様
- 三菱 UFJ 国際財団様
- 平和中島財団様
- 早稲田大学学生課様

#### ご協力いただいた団体・個人の皆様（順不同）

- 駐ルワンダ日本大使 宮下孝之様
- 駐ルワンダ日本大使館のみなさま
- Ambassador Dr. Charles Murigande, Deputy Vice-Chancellor in charge of Institutional Advancement in University Rwanda
- Mme Marie Louise Towari Kambenga, President of NPO Think About Education Rwanda
- Protestant Institute of Arts and Social Science 教授 佐々木和之様
- 同 NPO アマホロプロジェクトディレクター 斉藤照子様
- JICA ルワンダ支部の皆様
- ルワンダに在住、あるいは勤務している日本の方々
- ルワンダ国立大学様
- ジェノサイドメモリアル様
- PIASS (Protestant Institute of Arts and Social Science) 様
- ルワンダ王宮様
- ウムチョムイーザ学園様
- Zipline(Blood drone delivery)様
- ルワンダ議会様
- KLab 様
- FabLab Rwanda 様
- カリソケ研究センター様

誠にありがとうございました。



## おわりに

今回のルワンダ渡航メンバーは未だかつてない多様な人材だったのではないかと思います。学年でも2年生から5年生まで、大学も5大学からで、中には北海道大学の学生もおりました。これは、広く渡航メンバーを募集したことによります。そのため、ルワンダ側との事前の関係づくり、ルワンダについての勉強など、至らないことだらけでした。しかし、そのような多様なメンバーだからこそ、様々な視点で各々がルワンダと向き合ったのではないかと思います。十分とは言えない準備の中で、私達が持っていたのは「好奇心」だけだったのかもしれませんが。しかし、これこそが、相互理解にとって、極めて重要なことだと気づかされました。

渡航当初、ルワンダ人学生と初対面ということ、さらに言葉の壁もありうまくコミュニケーションが取れないのではないかと不安がありました。しかし、それは杞憂でした。もちろん、英語ができる学生はどんどん交流していましたが、そうでない学生も積極的に交流していました。その源泉は、相手への好奇心ではないでしょうか。相手への好奇心があるからこそ、伝えようとしますし、それが例え下手であっても、その姿勢こそコミュニケーションにおいて重要だと思います。今回の渡航メンバーは皆、強い好奇心を持っていましたので、初日からどんどん打ち解けて生きました。日本では、奥手であった学生が、ルワンダ人学生を質問責めにしておりました。多くのメンバーにとって初めてのルワンダ人でしたので、持ち前の好奇心で、どんどん距離を縮めていきました。最初は、日本と全く違うルワンダという環境への興味だったかもしれませんが、次第にそこで暮らす人々への興味となっていきました。その人の価値観や考え方、夢、恋愛にまで興味が尽きることはありませんでした。ルワンダ側も我々に興味を持って質問責めでした。このようにコミュニケーションを取ることで、意識していなくても、お互いを理解し合っていました。

短い時間ではありましたが、インターネットを通じての交流では生まれない「友情」が芽生えていきました。最後に空港で別れる際、皆と別れるが辛く、またいつか会いたいと自然と思えました。この時、この事業の醍醐味を感じました。お互いの国を訪問して、交流してこそ、本当の相互理解が生まれるのです。そして、これからも継続していかなければならないと感じました。この事業を継続してこられた先輩方の気持ちが理解できました。我々も後輩へバトンを繋ぎなればと感じました。後輩の皆さんは、好奇心を持って現地に行く勇気をぜひ持ってくださいということです。それが、当団体の相互理解への第一歩であると今回強く感じました。

最後になりますが、今回会議を開催するにあたり、多くのご支援をしていただきました。そのご支援がなければ本会議は実現できませんでした。この場を借りて全ての皆様に厚く御礼申し上げます。今回経た経験を少しでも、後輩たちや社会に還元して参ります。

日本ルワンダ学生会議 早稲田大学人間科学部5年

阿部理



ありがとう！  
Murakoze!

日本ルワンダ学生会議 第16回本会議活動報告書

2017年11月15日 第初版発行

発行先 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）公認

日本ルワンダ学生会議

連絡先 [japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)